
樹 守

(KIMORI)

～日本樹木医会北海道支部会報～
2012年3月31日 発行
(平成24年)

No. 21

事務局 〒060-0004
札幌市中央区北4条西5丁目
(財)北海道森林整備公社
Tel 011-281-4241
発行人 橋場 一行
編集人 真田 勝



日本樹木医会北海道支部

樹木医制度創設 20年を振り返って	橋場一行	3
新会員紹介 少しでも前へ	笠倉信暁	4
新会員紹介 樹木医になって	村木達男	5
「縁柱」に施した補修と今後の保護対策について	館 和夫	6
元町排水場百年桜樹木点検	山上勝治	10
宏楽縁のソメイヨシノ外科的処置	金田正弘	11
最近の森林・林業の現状について	福士正明	14
桜が咲いたよ・梅はまだかいな	伊藤 務	16
道北の森林地帯の今昔	高谷俊和	17
エゾシカの食害	豊田 栄	22
真駒内の古木くまなく調査によせて	阿部正太郎	24
樹木医の仕事	吉田憲一	26
鈴木順策氏北海道社会貢献賞受賞	事務局	28
卒業式を終えて	岩瀬 聡	29
札幌市円山公園における台風の影響による被害報告と考察	涌島美也子	30
北海道に自生する常緑広葉樹	真田 勝	33
スリランカの植物を見て	桜田通雄	34
幌萌のエゾヤマザクラ巨木の辿った道	金田正弘	36
道民の森の大ナラさん喜んでくれるかな	阿部正太郎	38
館 和夫さんの名作紹介	橋場一行	40
2平成3年度活動報告	事務局	41



真駒内の古木 くまなく調査

札幌の紺野さん

2011(23)12・13

開拓前から残る樹齢135年以上の31本確認

開拓前から真駒内に根を張る古木について伝えようと、札幌市中央区の郷土史研究家紺野哲郎さん(82)が、樹齢135年以上

25本に樹種プレート設置

「時代の变迁感じて」

紺野さんは、大正時 残る古木の樹齢や樹種の真駒内を描いた絵などを調べてきた。画から当時の地形などを分析したのを機に絵を6年(明治9年)、米画の中の巨木に興味を、国人指導者エドウィン持ち、昨春から樹木医・タンが広大な農場をらの協力で、真駒内公 開き、戦後は米軍が宿園と、隣接する団地に 舎やゴルフ場を建設。

の樹木の調査と保存に取り組んでいる。同地区をくまなく歩いて牧場開拓や米軍施設の建設、札幌五輪時代の開発を経て残った木の所在を確認し、7日には真駒内公園内の25本に推定樹齢や樹種を示すプレートを取り付け付けた。(佐野智子)

札幌五輪前後には多くの施設が追われ、この変遷の中で多くの木が伐採された。そこで紺野さんは、ダンの農場開設前から生えている樹齢1355年以上の木の所在を調べ、31本を確認した。樹種は、ハルニレが大部分を占める一方、オシロイバナだけで、紺野さんは「ダンの時代、牧場の柵に使われたからでは」とみる。

最も古いのは、五輪団地内のミスナラと真駒内公園内のイタヤカエドでも推定390年で、江戸時代から生き抜いてきたとみられる。道森林管理局は「それぞれ平均樹齢を真駒内公園で、プレート取り付けに立ち会う紺野さん

樹木医制度創設20年を振り返って

橋 場 一 行

本年は東日本大震災が発生し、多くの被災者がでており、一日も早い復興が望まれる年になりました。

樹木医制度は、1991年度に林野庁の「ふるさとの樹保全対策事業」の一環として発足し2011年度で20周年を迎え、記念すべき年になりました。

北海道からも、4名の樹木医が誕生しており、この第一期の方々が、1992年度に日本樹木医会北海道支部を結成し、道内での文化的価値のある巨樹・古木の保全等、樹木医の活動が始まり、現在48名の会員が道内各地で活躍しております。

各会員（樹木医）は、年齢が30歳代から70歳代まで平均58歳で、経験の豊富な会員から、若い清新に翔んだ会員まで幅広い年代となっており、各地域、職域において、開業樹木医、勤務樹木医等として活発に活動しております。

さらに、2011年度は、新しく3名の樹木医認定者が会員として加入され、これまでの会員とともに活躍が期待しております。

これまでの活動の内容は、樹木医の業務として営業を行っている場合やボランティア的に活動している場合がありますが、これらも社会的ニーズに対応した活動といえます。

これまで、20年にわたる活動実績が社会的に評価され、「北海道社会貢献賞に」、2008年度に北海道支部、2009年度に斎藤晶氏、2011年度に鈴木順策氏が受賞しました。

また、福士正明氏は樹木医活動とともに環境保全活動が評価され、2010年度に「自然環境功労者環境大臣表彰」を受賞しました。

主な活動としては、1999年に日本樹木医会北海道大会の開催、例年実施している講演会、技術研修会、支部の会誌「樹守」(20号)の発行、樹木医学会での研究発表等があげられます。

しかし、今後、より社会的認知を高めるためには、多くの技術的課題も残っており、支部をあげて解決する必要があります。

一つは、樹木の健康診断に当たり、的確な判定をするためには、これまでの診断技術に加え、より精度の高い機器を使用するなど、社会的にも高度の診断成果が要請されており、二つには、樹木のもつ自己防御機構を生かした治療技術の開発と実証などがあり、三つには、樹木が長期的にわたり健康を維持するため、予防樹木医学的な育成技術の開発が必要と考えられます。

今後、より高い樹木医技術を継続し、進化させるためには、「樹木医CPD制度」等のイノベーションを進める必要があります。

(一般社団法人日本樹木医会北海道支部長)

<新会員紹介>

少しでも前へ！



第21期生 1988号

(財)北海道森林整備公社 かさ くら のぶ あき 笠倉 信 暁

私は普段、業務で人工林や天然林の収穫に係る調査を行っています。しかし、自ら調査した木の伐倒現場に立ち会う機会はほとんどなく、評価の際の重要因子である材の腐朽等に関する欠点の裏づけは、経験豊かな先輩の方々に直接聞くという、耳学問によるものがほとんどでした。そのため、自分の調査に100%の自信が持てずにいました。そんな折、平成22年度から樹木医会の事務局が弊社内に置かれることとなり、また樹木診断業務も行われるようになりました。樹木医学とはよくわからないが、多方面から樹木を調べることには違いない、普段行っている調査の裏づけとなる知識と自信を得ることにもつながりそうだし、樹木診断業務も有資格者として参加できれば仕事の幅も広がるだろう等、いろいろ考えた結果、受験を決意しました。

それから約6ヶ月間、少しでも前へ！を旨に勉強に励みました。まず、樹木医の手引き、過去問ほか、色々な資料を揃え勉強を始めましたが、対象分野が想像以上に幅広く、どこから手をつけようか悩みました。結局、樹木医学とは何なのか俯瞰できるのではと思い、生態学(Ecology)を勉強することから始めました。しかし、過去の不勉強がたたりに、高校の生物の教科書まで遡り確認することも多く、あっという間に時は過ぎ、気づけば土壤等、試験で比重のある分野を満足に勉強できていないという有様でした。当初、合格するまで2、3年はかかるだろうと予想していましたが、いざ試験に臨むにあたり、一発で合格するに越したことはない、残り僅かな時間を往生際悪く粘りに粘りました。その甲斐あってか、一次は無事通過、これはいろいろな分野を涉猟する生態学にも時間を割いていたためか、論文がスムーズに書けたことが要因ではないかと思えます。

さて、その後のつくばでの研修です。無い頭を振り絞り、落ちこぼれぬよう必死で頑張りました。実習では、「帰ったらすぐ調査を行うんだ、その時にこういうものに直面したらどうする？」ということを念頭に、思いついた事はどんどん質問しました。研修生ほぼ全員と名刺も交換し、仲間もたくさんできました。とにかくガムシヤラな2週間で疲労困憊でしたが、無事終わったときの開放感は何にも例え難いものでした。

昨年の樹木医会北海道支部総会では賛助会員として出席し、その際、阿部事務局長から樹木医試験に挑戦される方ですと紹介を受けてしまってから、少々プレッシャーも感じていましたが、なんとか合格することができました。これも先輩樹木医、職場の上司のご指導協力のおかげです。そして、なにより身重の体でありながら、受験勉強を支え、試験や研修と快く送り出してくれた妻には、本当に感謝の気持ちで一杯です。

今、樹木医としての第一歩が始まろうとしています。普段の業務では、主たるものと二足のわらじを履くこととなりますが、謙虚な姿勢で常に最新の知識に注意を払い、また先輩、同期の樹木医の方々に教えを請いながら、少しでも前へ！をモットーに頑張っていきたいと思っております。どうかご指導鞭撻の程よろしく願いいたします。



樹木医になって

第21期生 2071号 むら き たつ お 村 木 達 男

平成23年度の第21期の樹木医研修で樹木医の資格をいただいた村木です。よろしくお願いします。

樹木医制度が始まってまもなくの頃、平成5年に道の環境生活部自然保護課に異動になり、北海道自然環境等保全条例に基づいて指定されている北海道記念保護樹木の担当の係長になりました。

記念保護樹木は昭和40年代に初めて指定され、初期の指定木は長年月が経過したため、衰弱や、腐朽による倒木のリスクを抱えているものがありました。

このため、私が担当する前から、樹木医の先生方の協力を得て、樹木診断が行われていました。

私が担当したときには、高齢木の樹木診断を継続することと、治療が必要と判断される樹木のため、予算を何とか捻出する必要がありました。既存の予算から治療費を捻出することが難しいため、担当の方が、新たに樹木診断と治療の予算を粘り強く要求し、確か、3年間の予算を確保することができました。

樹木医について考えるとき、いつもこのことが思い出されます。

当時、高齢の銘木という認識はありましたが、それまでの私の業務は、森林の樹木を木材として利用することがメインであったことから、北海道の銘木と言え、ナラ、セン、マカバなどの、いわゆる北海雑木や床柱としてのイチイ（オンコ）などでした。

この自然保護課時代以来、樹木は「立っていて価値ある木と、寝て価値が出る木」があると考えたものです。

一昨年、樹木医に挑戦するため、「最新・樹木医の手引き」を購入し、じっくり読ませてもらいました。

かなりの部分は、これまでの業務や学生時代の復習と言えたかもしれませんが、ブランチカラーや樹木の防御機構になると、今までの知識がひっくり返るような驚きを覚えました。もとい、はじめは意味不明といった方がよかったかもしれません。研修まで含めて、シャイゴさんの考え方が徐々にわかり始めてきたような気がします。

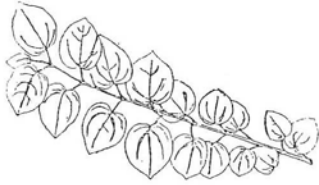
さて、これから樹木医として、どのようなことができるのか、同期の方々に、既に活躍の場を得ている方もいるように思われますが、林業・木材産業を主として考えてきた私にとって、1本1本を相手にし、すべての樹木を活かす努力をしていかなければならないという課題には重たいものを感じます。

研修の最後に行われた面接で、「どのような樹木医になりたいですか」と問われ、はたと考え込んでしまいました。

その答えを出すため、これから樹木医として多くのことを学んでいかなければならないと思っています。

樹木医の1年生です。先輩の方々から多くのことを学んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

「縁桂」に施した補修と今後の保護対策について



第1期 樹木医 ^{たて}館 ^{かず}和 ^お夫

「縁桂」補修事業の実施経過

平成23年10月13日と21日の両日、北海道の名木に指定されている乙部町の「縁桂」の補修のお手伝いをさせていただいた。初日は午前9時に役場前に集合、町長に挨拶を済ませた後、富岡地区の縁桂公園に移動し、さらに駐車場から約1km離れた現場に赴いて縄梯子の設置等の作業準備を進めていた乙部振興公社職員に合流した。

作業の開始に当たって担当者に、「対象木に存在する上向きの穴や割れ目は雨水等が入って劣化が進まないよう、珪藻土を母材とした充填剤でふさぐか、樹脂系、もしくはラック系の保護塗料を塗る」という、私なりの補修方針を示し、樹洞充填剤（商品名：ウッドイ・ドクター、珪藻土製剤）の取り扱いについて概略の説明を行なった後、樹に上って主な損傷部分の状況を観察するとともに、持参した資材（充填剤12kg、保護用塗料2種各1kg）を用いて、樹幹切断部の割れ目及び欠損箇所への充填と、その直下の枯れ下り部分への保護剤の塗布を行った。

同月21日には、補修作業の記録作成のため、午前9時前に、現場へ到着。前回、役場に要請して準備していただいた主幹断面キャップと、役場が追加購入した資材（樹洞充填剤約15kg、保護塗料2種各1kg）を用いて前回に引き続き公社のスタッフが中心となって行った補修作業の要所をチェックしながら写真撮影、メモ、スケッチ等、必要な現場記録を作成した。この日の主な作業内容は、東側樹幹上部切断面への保護キャップ（FRP製）の取り付けと、西側主幹割裂部分への充填剤による補修、それに少数ながら樹幹基部の瘤や根株上に発生していた小孔に対する充填剤の施用であった。

作業の終了に際しては、同日までに実施したすべての充填剤の施用部分、及び主幹連結部の上側に発生している樹皮の剥離部分について、近日中に樹木保護剤（商品名：デンドローサン、ラックバルサン累計各2kg）を塗布し終わるよう、関係者に要請して帰宅した。

同月27日にすべての作業が完了した旨、町役場の関係者から連絡を受けたが、通算3日間の作業日は、いずれも晴天に恵まれ、無事、補修事業を完了できたことは幸いであった。

樹体各部の損傷・劣化の状況と対策

平成23年6月23日に行った地上からの予察調査と、このたび二度にわたって行った地上及び樹上からの目視調査の結果、把握した本樹の主要部分の損傷・劣化の状況と、実施した対策について、いま少し詳しく記してみたい。ただし、双幹樹である本樹について述べる場合、混同を避けるため、以下、神社の正面から見て左側の桂を「西桂」、右側の桂は

「東桂」と仮称し、また、樹の表裏についても神社の正面(南側)を表、山側(北面)を裏として述べることにしたい。

1) 東 桂

東桂で最も懸念される点は、往年の災害により主幹が、地上12~13m付近で折損し、切断された直径約50cmの断面の裂け目から雨水が流入し、樹皮下や辺材のかなりの部分が枯れ下がり、本樹の連理部に悪影響が及ぶ可能性があることである。主幹の断面については、当初、主幹保護用のキャップとして銅板もしくは亜鉛鉄板等金属板の加工品を用意するよう役場に提案したが、結局、耐久性などの点から、より適した素材として地元造船所の手になる繊維強化プラスチック(FRP)製の保護キャップが採用されることになった。

10月13日に東桂の主幹断面よりやや大きめに型取りされたキャップは、10月21日に現場に運ばれ、チェーンソーで十文字に分割した上、樹上で断面に合うよう10cm内外の重なりをもって寄せ合わされ、コーキング材で隙間をふさぎ針金で断面に固定した後、鼠色の塗料が吹き付けられて完成した。

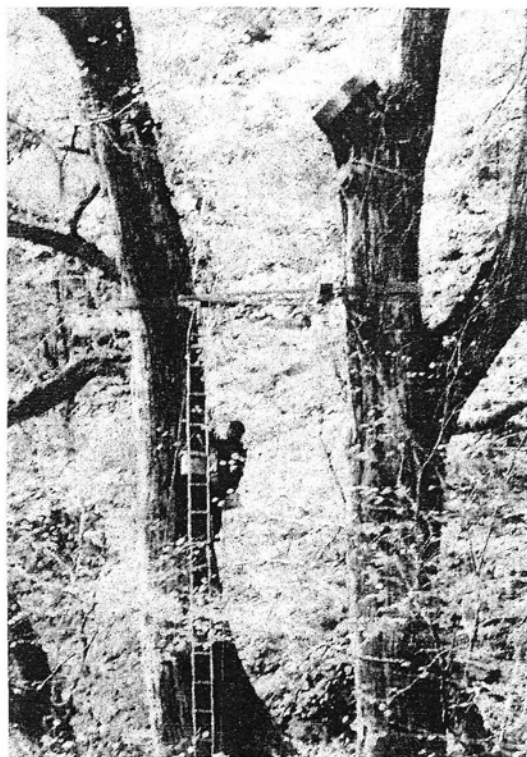


写真-1 木口にキャップを設置(右側上部)

断面直下の大きな割裂面(写真-2左)に対しては、前記の樹洞充填剤(商品名:ウッドドクター、珪藻セラミック粉製剤)を使用して整形した(写真-2右)。本剤は等量の水を加え、練り上げて用いるもので、原材料の色は肌色に近い淡茶褐色のため、私の場合はさらに灰褐色に近い樹の色に合わせるため少量の墨汁(容量比1~2%)を加えて用いた。欠損部が大きく、充填剤が足りない部分については、ガーデンパークという商品名で売られている樹皮片に発泡スチロール片を内側に詰めて増量した上で施用した。

主要な損傷部分に続く樹皮の剥落した枯れ下り部分には、別名を人工樹皮とも呼ばれる枝幹、材部表面の保護剤を塗布した。ただし、形成層が枯死しても樹皮が未だ剥離、剥落していない樹幹の凹部や縦溝部分については枯損範囲が不明確なため、今回は塗布の対象とはしなかった。なお、充填剤は、垂直面に施した場合、剥落・流亡しやすいので、主幹切断面の裂け目には、予め傘釘に針金をからませた上で充填剤を塗り込み、剥落を防ぐとともに、固化後は前記の保護剤を表面に塗布して風化を防ぎ、整形した充填部分を出来るだけ長持ちさせるよう配慮した。これらの充填剤と塗料は、いずれも原材料の防菌効果と

塗料としての遮断効果により、対象木の腐朽損傷の進行をいくらかでも遅らせる効果が期待できるものと思われる。

その他、10月21日に行った東桂に対する処置としては、基部の瘤や根株上に生じていた数個の小孔に対しておこなった充填剤による補修作業がある。



写真-2 キャップ設置前の断面周辺（左は処置前、右は処置後）

2) 西 桂

西桂の損傷の内、現在、最も懸念されるのは樹幹連理部の側縁から上方に長く伸びた、幅の広い部分は掌が楽に入る程度の大きな裂け目（写真-3、上は補修前、下は補修後・ただし、いずれも部分）である。連理部上方には中が空洞になっている小孔もあり、樹幹の表、裏側ともに形成された裂け目は、従前、剥離防止用に設置されたワイヤーの直下にまで達している。また、西桂でもう一つ懸念される点は、連理枝の癒合部分が樹体の揺れや冠雪によるたわみなどの物理的な外力によって、接合部の上方の樹皮表面に、近い将来、剥離しそうな断裂を生じていることである。

対策については本樹の場合も東桂と同様、当面、大きな幅の広い割裂部分には樹皮塊と発泡スチロールの細片を埋め込み、表面に樹洞充填剤を充填した上、表面に人工樹皮を塗って仕上げた。また、上記の連理部上面の樹皮に生じた割れ目に対しては、10月27日に人工樹皮（商品名：ラックバルサン、天然樹脂系樹木保護用塗布剤、及び人工樹脂系のデンドローサン）を上塗りして雨水の流入を防ぐよう処置した。

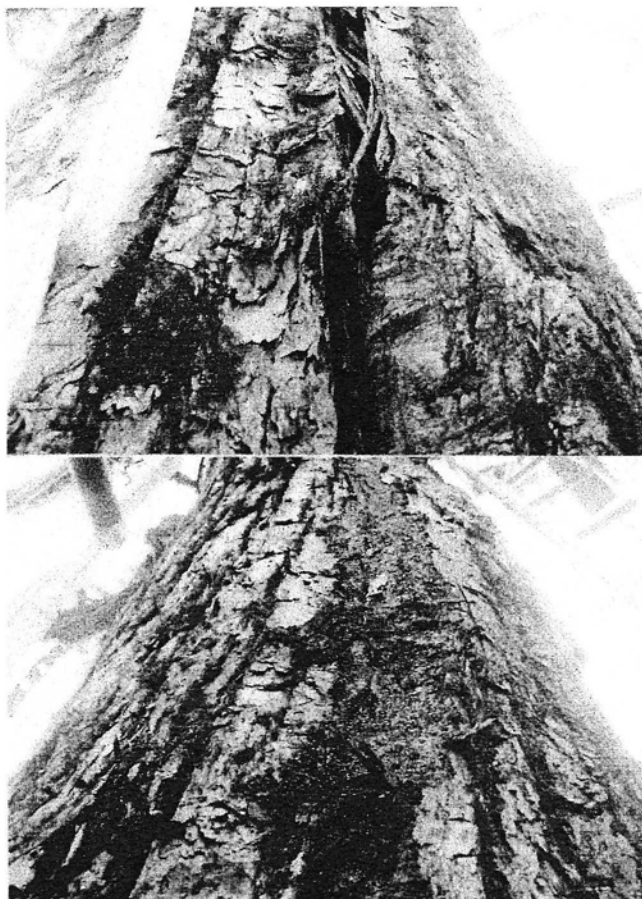


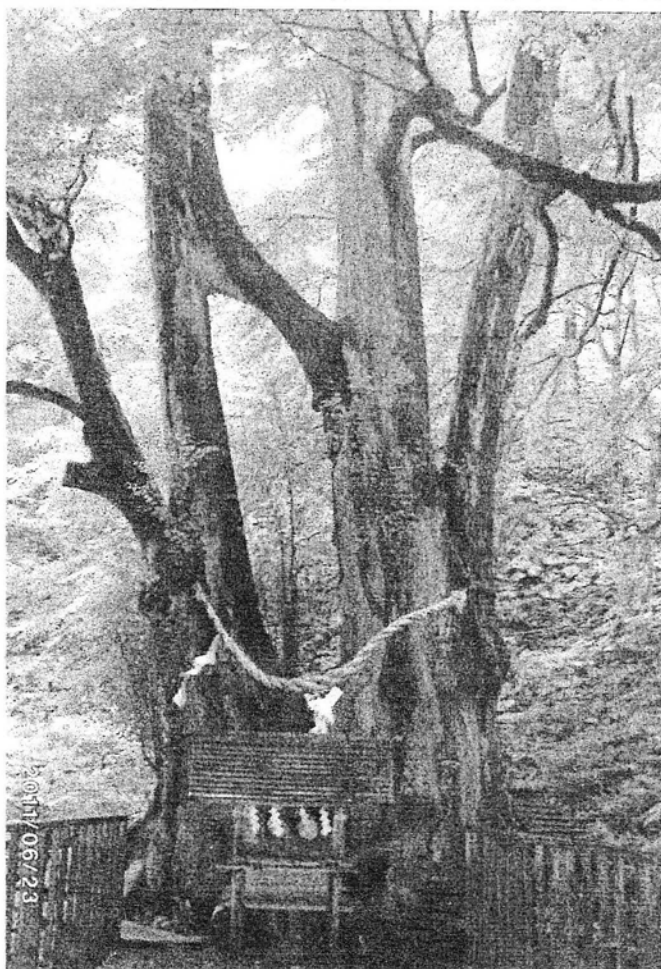
写真-3 上は処置前の長い裂け目 下は処置後の状態

さらに、地上 6~8m の位置で東桂から西桂側へ斜上している連理部の表側上部に存在する内部が空洞になった小孔に対しては、柿渋につけた毛綿状の^{ひかわ}松皮を固く詰め込んで、雨水のほか、昆虫や鳥類、各種の小動物等の侵入を防止する措置を講じた。

今後の保護対策について

双幹樹である本樹の所在場所は、狭い山間の溪流に面しているため、南側の支持根は溪流によって、たびたび洗掘され、損傷した結果と思われる大きな空洞を伴いながら神社の背後に当る斜面の下に生立している。樹は全体に斜面の上方(北側)から南方の溪流側に傾いており、南西側の高所に伸びた太い枝が重量を増し、あるいは冬季に多量に冠雪した場合には、樹幹内の空洞の位置や大きさ、腐朽の進行の度合いによっては、折れたり倒れたりする危険性がある。

剥皮・穿孔等の調査方法をとることがはばかれる御神木であり、樹上での移動もままならない巨木である本樹の場合、既往の損傷や腐朽の広がりや程度の的確に把握することは難しいが、被害部分の調査が不十分な点は、今後、木槌などで幹を軽くたたきながら、聴覚で腐朽・損傷の範囲・程度等を精密に判定する叩打法による材質調査か、インパルスハンマー等の科学的器材を利用した精細な調査によって、損傷、劣化の現況を、より詳しく把握した上で、連理部に無理な外力がかかって剥離しないよう支点を分散させて、樹体を長期にわたって安定的に保持できるよう、剥離防止ワイヤーを増設するなど、今後とも出来る限り予防的な保護措置を講ずべきものと考えらる。



縁結びの桂

所在地:乙部町富丘
国有林乙部事業区 453 林班ち小班
幹周り:610cm、500cm
樹高:40m、40m
樹齢:推定 300年 (1991年調)
保護制度:北海道記念保護樹木
「縁結びの神が宿る」と伝えられているカツラで、この木に触ると良縁が結ばれると崇められ多くに人々に敬愛される名木

約 6m の高さでどちらかの枝が 30cm くらいの太さで合体している

元町配水場百年桜樹木点検

第5期生 山上 勝治

はじめに

函館市元町配水場には、明治22年完成の中区配水池と明治29年完成の高区配水池があります。中区配水池は百年以上を経過した現在もその役割を果たしている日本最古の配水池で、近代水道百選にも選ばれています。この配水池からの水は、函館山周辺の市民約2万人が使用しています。

この高区配水池の前に、樹齢百年と言われるサクラが2本生育しています。そのいずれもが根本周4m、枝張り20mのみごとな巨木です。このサクラは百年桜と呼ばれ多くの人々に親しまれ、春の開花時期には訪れる人々を楽しませてくれています。最近、この桜の花数が減り、元気がなくなっているようなので点検票をもとに点検を行い今後の管理計画に役立てたいと思います。

百年桜樹木点検票

樹木点検票						
調査地	函館市元町配水場(函館市元町1丁目)		調査年月日	23年3月7日、7月1日		
調査樹種	ソメイヨシノ(ハナ桜) <i>Prunus × yedoensis</i>		所有・管理者	函館市企業局	樹木番号	25
外観的性状(目視判定)						
目視による健全度	枝葉の厚み・色	枝葉の量	樹形バランス	剪定跡	病害虫	
健全 葉密 葉濃 良好 普通 悪い	正常 やや少ない	自然 仕立て 不整	無 少* 多い	無 少* 多い	無 少* 多い	
○	○	○	○	○	○	
枝葉の発生状況						
無 少* 多い						
○						
老朽の枝が多く葉形も小さいため全体に萎んでいる印象を受ける。骨格をなす若い枝が少ないため花付きが少なくなっている。害虫(ママイマイガ)による被害が確認される。枯れ枝、テングス病はほとんど確認されない。						
樹体の損傷・形状(目視判定)						
傷・腐朽の有無	樹皮の危険性	太枝折れ落下危険性	枯れ(幹・太枝)	樹体の傾斜	樹皮の剥離・色	
無 少* 多い	無 少* 多い	無 少* 多い	無 少* 多い	傾 傾*	正常 剥離 異常	
○	○	○	○	○	○	
主幹に腐朽が確認されている剪定跡(写真2)と、不定根が発生している主幹(写真3)、樹皮が剥離し木部が露出している主幹(写真4)など幹、枝に損傷が確認される。樹皮や太枝の腐傷、落下の危険性は現時点では少ないが継続的な確認が必要である。また代わりとなる枝の育成を行う必要がある。						
形状寸法						
樹高	9m					
林 量	15.5m×18.5m					
株立ち数	4本					
幹周	1.4, 1.5, 2.1, 1.1					
根元直径	1.5m					
根元周	4.0m					
今後の保護育成項目						
樹体の補強	傷・腐朽部治療	枝葉樹皮成長促進	土壌改良	施肥	害虫消毒	
不要	必要	必要(不定根の育成)	必要	必要	必要	
枝葉育成	生育状況点検	その他調査	土壌PH	土壌PH測定の結果酸性化しているため有機質系の改良料、肥料で土壌改良が効果的と思われる。		
必要	日頃の点検	様々調査	定期的			
評価 太枝の傷や幹の腐朽が多数確認される。老化した枝が多く新枝の成長が悪い。そのため花数が減り樹勢(活力)が低下している印象を受ける。良好な開花を維持していくには主幹の差切りが必要である。樹勢を回復し新しい枝を発生させ、樹皮の成長を促進させる。剪定方法、施肥に検討が必要。						
対策 剪定・消毒・剪定など通常管理業務に加え、傷・腐朽部の治療、施肥、土壌改良を行うことで樹勢を回復させる。老化した枝を除去し新枝の育成を行い代替更新を図る。また傷・腐朽部の治療については適切な必要性を見極め治療にあたる。土壌の状態、根元の状態も今後把握する必要がある。						

写真・略図

調査地	函館市元町配水場(函館市元町1丁目)		調査年月日	23年3月7日、7月1日		
調査樹種	ソメイヨシノ(ハナ桜) <i>Prunus × yedoensis</i>		所有・管理者	函館市企業局	樹木番号	25
調査木の形状・特徴						
全容(東西南北)						
NW	写真1	SW	写真2			
全体樹形		過去の剪定痕が大きな傷、腐朽となっている。				
SE	写真3	NE	写真4			
腐朽が進み不定根が多数発生している。写真下：太枝の枯れ。		樹皮がはがれ、ほぼ枯れている太枝。将来折損落下の危険がある。				
枝葉の量が少なく、枝先の枯れが目立つ。老化した太枝が多く、骨格となる若い枝が少ない。						
平成23年7月撮影						

総評

見た目に樹勢の衰えを感じさせる要因は、樹全体を占める老化した枝や放置されたままの傷・腐朽が多く残されている事です。枝先が衰弱し葉数・花数が減り樹全体のボリューム感が無くなってきています。改善するには樹全体の若返りが必須です。施肥や土壌改良を行い、芽吹きを活発にして活力ある枝を増やす事、不要枝や老齢枝の剪定除去を行い傷・腐朽の治療を行う事が効果的です。

老齢枝、不要枝とはいえ現在骨格をなしている太枝を剪定除去するには後継枝の成長を確認しながら行う必要があります。今後、健全で大きな樹形を維持して行くには後継枝の育成と老齢枝との世代交代をバランス良く行う事が重要課題になります。



宏楽園のソメイヨシノ外科的処置

11期生 金田 正弘



満開のソメイヨシノ (2010年5月16日)

札幌道朝里インターを降りて間もなく左手に「宏楽園レストランさくら」が見えてきます。小樽市内有数の桜名所宏楽園にある一本桜で、温泉入口の目印になっているソメイヨシノ (*Cerasus yedoensis* Somei-yosino Fujino) です。2003年(9年前)初めて見た時、イルミネーションのコードをぐるぐる巻きにつけられ、花付き不良の痛々しい樹姿をした可哀相な桜でした。

宏楽園の桜類を本格的に治療することになり、このソメイヨシノも枯枝除去、根系施肥等を行ない、何とか入口看板としての景観をとり戻しました。しかし幹枝の腐朽に伴うカワラタケの多発等衰弱の激しい状況に変わりなく、2011年3月19日樹木医による樹勢回復を目的とした外科的処置を実施しました。ソメイヨシノは傷みやすい反面、適正な処置次第で樹勢再生が可能な桜です。道内でも道南地方を中心に、札幌圏でも多く見られるソメイヨシノ治療の一助になればと思います。内容を紹介します。

1. 幹枝腐朽の処置

(イ) 幹の腐朽状況



①ソメイヨシノ主幹部の腐朽



赤丸印部分の拡大

地上3m程で主幹を失った幹頂部の腐朽は激しく、中の材部に進行しているようです。頂部から伸びる側枝までも腐朽しているのが見えます。幹は凸凹で白色腐朽の兆候を示すカワラタケが着生していました。又、赤丸印①はイルミネーション用電気コンセント等を収納するための大きなプラボックスが取り付けられていた痕で、線も埋め込まれていました。

れていた痕で、線も埋め込まれていました。

(ロ) 不定根の発生



② 頂部腐朽材に発生する不定根

白色に腐れた材部を剥がしてみると細い根が密に発生しています②。これを「不定根」と称し、生きている材組織（カルス）から発生伸長し、セルロース、リグニンを失い土にかえろうとしている腐朽材組織を糧にして、これらを繋ぎ積極的に成長するものと考えています。

(ハ) 不定根誘導処置（2011年3月20日）

ソメイヨシノは不定根が発生しやすい樹種で、物理的な傷からも普通に発根することがあります。古木のソメイヨシノを観察すると不定根が太く成長し（不定根の幹化）、地中に侵入している樹姿を見ることができます。これらより、2001年から実施している不定根誘導による幹回復処置を行うことにしました。



③ 腐朽部の整形



整形完了

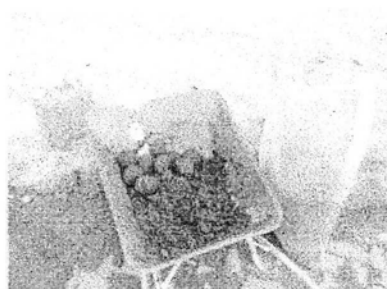


④ 保護剤の塗布

材の腐朽部を削りすぎないよう簡単な整形をします（果樹園等で腐乱病被害部除去や粗皮削りに使用する整形ナイフを使用、③）。この整形後、保護剤トップジンMペーストを塗布します④。保護剤には他にユゴー材、バッチレート等があります。



主幹部の保護処置



⑤ ピートモス+くん炭の充填材



幹患部に充填処置

不定根発生部分や保護剤塗布部を中心にピートモス+くん炭（8：2）を混ぜ加水しドロダンゴ状に練った充填材を貼りつけます⑤。パーライトやゼオライトを少し添加する場合があります。現在、不定根の伸長を促す新たな添加資材をさがしています。



⑥黒ビニール巻き



南側完了



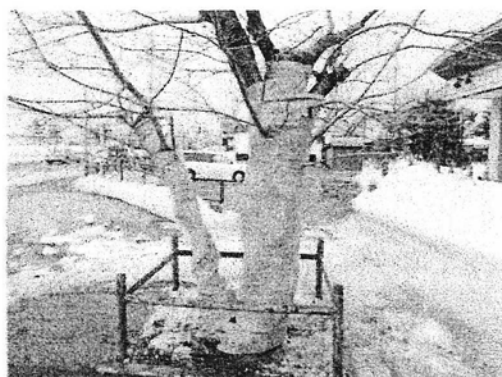
北側完了



⑦緑化テープによる幹巻き状況

充填材（ピートモス+くん炭）を貼り付け後、乾燥防止のためすみやかに黒ビニール（農業用マルチシート）を巻きます⑥。緑化テープ（W=15cm 麻製）で幹巻きし処置完成です⑦。上部に隙間を作り、雨水が自然に入るようにしておきます。

（二）不定根誘導処置の完成



⑧南側完成



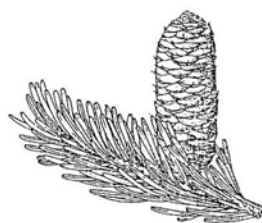
北側完成

⑥～⑦の処置は取り付けが簡単にできるものです。したがって取りはずしも簡単で幹内部に伸びる不定根の様子を確認することができます。不定根は樹木活動期に1ヶ月単位で成長し変化することがわかってきました。処置後の定期的な観察が必要です。最終目的は不定根を幹腐朽内部又は幹外側から地面の根系部に伸長させ、幹化を促し腐朽材部にとって変わり、再生させることを目指すものです。

2. 樹木医の共同作業

今回実施したソメイヨシノ外科処置にあたり、複数の樹木医による共同作業を行うことができました。今後このような機会が続くことを期待しています。

治療に当たったのは13期熊谷恒希氏、16期鮫島宗俊氏、樹木医志望の造園業大釜さん、11期金田正弘、補助の息子紘幸の5名で実施したものです。



最近の森林・林業の現状について

岩見沢市 第6期樹木医 福士 正明

昨年6月下旬に開催された「森林・林業白書」などに関する北海道ブロック説明会や今年1月の空知森林管理署主催の「石狩空知流域の地域管理経営計画の策定に関する地元意見交換会」などに出席し、最近の林業情勢を知る上で参考になることが多かった。

ブロック説明会では、木材の需要拡大、地球温暖化と森林、多様で健全な森林の整備・保全、林業・山林の活性化、林産物需給と木材産業などについての説明がなされ、平成23年を「森林・林業再生元年」とし、改定の方角を次のように定めた。

ー森林・林業再生の取り組みー

1. 森林計画制度の見直し
2. 適切な森林施業が確実に行われる仕組みの整備「森林管理・環境保全直接支払い制度」の導入
3. 低コスト化に向けた路網整備の加速化
4. 担い手となる林業事業者の育成
5. 国産材の需要拡大と効率的な加工・流通体制の確立
6. フォレスター等の人材育成

計画的な森林施業の定着・集約化と路網整備の進展による低コスト作業システムの確立

◎ 持続的な森林経営の確立 ◎ 国産材の安定供給体制の構築により、10年後の木材自給率50%以上とし、森林の多面的機能の発揮、雇用創出、山村地域の活性化、低炭素社会構築への寄与などをめざす。また、生物多様性に関して、COP10で、戦略計画（愛知目標）と遺伝資源へのアクセスと利益配分に関する「名古屋議定書」が採択され、森林関係については2020年までに

○森林を含む自然生息地の損失速度を少なくとも半減する。

○生物多様性の保全を確保するよう、農林水産業が行われる地域を持続的に管理

○少なくとも陸地・内陸水域の17%、沿岸域・海域の10%を保護地域により保全

○劣化した生態系の15%以上の回復により、気候変動の緩和・適応と砂漠化対応に貢献などが定められている。

ー木材需給の現状ー

国産材の供給は、人工林資源の充実により、平成14以降は増加傾向にあり、木材輸入は需要減少等により平成8年をピークに減少傾向に転じ、木材自給率は平成14年を底として上昇傾向にある。ちなみに平成21年の木材自給率は27.8%である。

輸入材	平成8年	9,001万m ³	国産材	昭和42年	5,274万m ³
	平成21年	4,562万m ³		平成21年	1,759万m ³

一方、木材需要は平成8年以降減少方向に転じ、平成21年には、対前年度比19%減と大幅な減少を示している、一人当たりの木材需要量もピーク時の昭和48年の半分までに落ち込んでいる。

昭和48年 11,758万m³
一人当たり 1.08 m³/人

平成21年 6,321万m³
一人当たり 0.50 m³/人

住宅着工戸数の減少により、製材用材の需要はピーク時の 1/3 まで減少し、紙・板紙生産量の停滞により、パルプ・チップ用材の需要も減少傾向にある。また、合板用材の需要も漸減傾向に推移し、我が国の人口は平成 32 年には約 400 万人、平成 42 年には約 1200 万人の減少が見込まれる。

今後、住宅着工戸数や紙・板紙の需要が大幅に増加する事は見込めず、木材需要は減少傾向が継続すると考えられる。

－木材需要拡大に向けて－

- 戦後、国や地方公共団体が進めてきた建築物の非木造化を改め、「公共建築物等における木材の利用に関する法律」が平成 22 年に成立し、10 月施行により低層の公共建築物の積極的木造化が促進されること。
- 「電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特措法」により石炭火力発電所における木質バイオマスの混合利用が進展し、「未利用間伐材等」の活用が不可欠であること。
- 我が国の木材輸出額が平成 13 年以降増加傾向にあり、中国と韓国を重点国として、付加価値の高い製品の輸出を推進することなどにより、木材需要を拡大し、山元への還元を通じて林業生産活動の活性化と森林整備の促進につなげる。

－健全な森林整備と国際的取り組み－

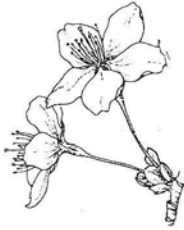
木材需要の拡大に当たっては、将来にわたる森林資源の持続的利用を損なわないため、木材の需要量を森林資源量・成長量に見合った規模に保ち、森林資源を維持するとともに、伐採箇所の再造林により資源再生をはかることが重要である。

森林の多面的機能の発揮のため、間伐の共同実施・路網の整備等の総合的な間伐対策を推進し、平成 21 年度は 59 万 ha の間伐が実施されたり、水源涵養、山地災害の防止など森林の公益的機能を有する森林について計画的に保安林に指定し、平成 21 年度 1,196 万 ha と森林面積の 48% にたっている。

「なら枯れ」被害地域は 1 都 4 県で発生し、29 都府県まで拡大しているが、被害拡大防止のため被害木の駆除や防除対策が行われている。

国際的取り組みとして、世界の森林は、アフリカと南米でそれぞれ年平均 300 万 ha 以上減少しているが、一方アジアでは年平均 224 万 ha 増加するなど、全体として、2000～2010 年までの 10 年間で年平均 521 万 ha 減少しているが、我が国は、技術協力資金協力などの 2 カ国間協力、国際機関を通じての他国間協力により、持続可能な森林経営を推進するための国際協力を推進している。以上が北海道ブロック説明会の概要である。

説明会に出席して、2001 年の「林業基本法」改正にともない、木材生産を主体としたものから、森林の多面的機能な機能の持続的発揮を図る森林管理・保全を重視したものに転換したが、国有林野の機能類型区分が、水土保持林(水源かん養、山地災害を重視する森林)68%、森林と人との共生林(生態系や環境の保全、文化の創造を担う森林)28%、資源の循環利用林(資源の循環利用を担う森林)4%であることに国産材の安定的供給や需要の拡大を目指しながら政策と現実との乖離を感ずる。木材生産としての経済林より公益的・多面的機能に軸足を置く森林政策の見直しをすべきだとの感想をもった。



桜が咲いたよ・梅はまだがいな

樹木医 第3期生 伊藤 務

桜が咲いたよ・梅はまだがいな・・・テンツクテンツク・スツントン。アラ、今日はいやにご機嫌ですね。でも、それって梅が先で逆でないの。

阿呆、この真冬に花瓶の中で桜が咲いたんだよ。
アツ、桜切る馬鹿・梅切らぬ馬鹿。

馬鹿なことをシャベルな、人間が悪いんでないか、俺だってそのくらいのことは知っているよ、レッキとした樹木医の端切れだからな！

何言っているのよ端くれですよ。うるさい！
これはだね、屋根からの大雪で枝が折れたんだ、だから切ったのではない、折れたんだ。

こんな小さな庭に植えるからよ、だから言ったんでしょ、桜は早く大きくなるって。

そうだな、あんな小さな苗木が、今では3mにもなったもなあ、反省、反省、たまにはいいこと言うんだな、大きな庭が欲しいねえ～。

オハイ早く桜酒持って来い。そんなお酒ありませんよ、梅酒なら有りますが・・・。

白い花って綺麗だな。アラ、桜の花は桃色が普通ですけど。間抜けなことを言ってんじゃないよ、

ややこしくなってるべ、これはね、千島桜って言うんだ、そこらに、そうそうある木じゃないよ。ああ良い日だ、テンツク、ツクテン、スツンテン、桜の花見で梅酒もウメいねえ～。

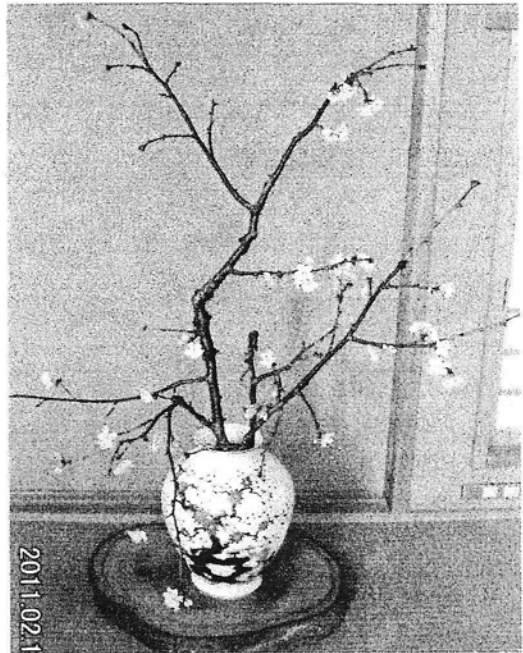


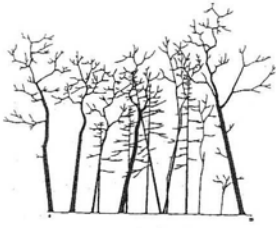
写真-1 真冬に梅の花瓶に咲いた千島桜



写真-2 裏庭の千島桜

私の家の裏庭にも千島桜を植えたものです。毎年5月初め、白い花が開花する度に、楽しかった植樹祭のことなどが、なつかしく思い出されます。

平成13年に、桜の花に国境は無い、との合言葉で、第三期生を中心に樹木医の有志23名が、当時北海道堀達也知事の親書を携えて、サハリン技術研修交流団として宗谷海峡を渡りました。六日間の日程の中で、各地を見学したり、表敬訪問、林業関係者との意見交換や懇親会が開かれました。中でも日本から持参した千島桜10本と、蝦夷山桜の苗木30本を友好親善として、青年の船で来ていた日・露のたくさんの子供たちと記念植樹を行いました。サハリンに行った記念として、



《 道北の森林地帯の今昔 ^{いまむかし} 》

第19期生 高谷 俊和

1 北国の意志という「川」？

私が暮らしている美深町は、旭川と稚内のちょうど中間あたりにある人口が5千人ほどの町です。札幌圏や地方の中核都市を除く殆どの市町村と同じように、過疎化や高齢化が進行してはいますが、かつては林業で一時代を支えた町でもあります。

開拓の跡は明治32年といえますから、道南や海岸線から開拓が始まった道内でもかなり遅い方だと思います。語源は、アイヌ語の「ピウカ」（石の多い川原の意）だそうで、最北の大河といわれる「天塩川」のほとりに位置しています。

この川の源は、北見山地の天塩岳（標高1,557.6m）で、北流しながらいくつかの狭窄部を抜け、日本海に注いでいます。流域面積は5,590km²、幹川流路延長は256kmと、信濃川、利根川、石狩川に次ぐ日本有数の大河です。また、流域の上流部は天塩岳道立自然公園、下流部は利尻・礼文・サロベツ国立公園に指定され、緑豊かな自然が残されている河川として知られています。上川管内に北見山地があり、天塩岳があるのはこれ如何にという気がします、そういえば十勝の広尾町にも十勝岳があったことを思い出しました。



名前は、テシ・オ・ペツというアイヌ語に由来し、テシは漁に用いる築（やな）で「築・多い川」の意味だそうです。

あちこちで岩が築のような形で川を横断しているところからこう呼ばれているようで、写真のようなたたずまいは、美深でも見られます。

日本の河川では希有といわれる北に向かって流れる天塩川、これを「北国の意志」と詠んだ短歌があります。

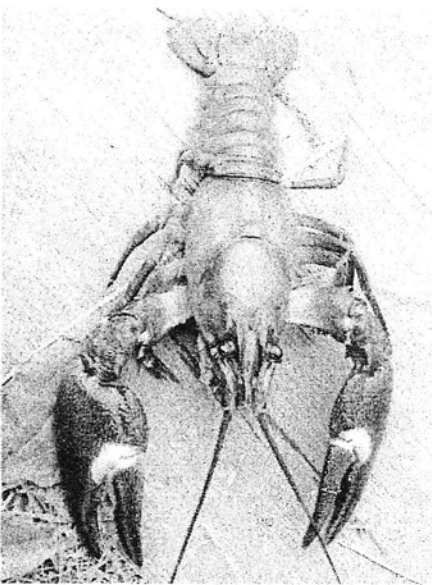
『直ちには 海に下らず 北を指す 天塩川は 北国の意志』という短歌で、詠者は斉藤さんという地元の方です。人々に極寒の地でなお北上して営みを続けてきた地域の姿と重ね合わせ、大きな共感を生みました。昭和48年のことです。

また、天塩川は約160kmに渡り人工物で遮られることなく海へ下れる、日本最長のカヌー・ツーリング ができる川でもあります。あちこちにカヌー・ポートがあり、季節にはカヌーを愛好する人たちが賑わいます。川に堰堤や取水堰といった障害物がないのは、美深以北では「米作」ができないからだというわけです。



私も、昨年カヌー大会の開会式に参加しましたが、全国各地から沢山の方が集まっています。中でも驚いたことは、シルバー世代といいたまうか、60歳を超えて現役を引退した人たちのこと。それも、キャンピングカーや立派なカヌー・装備品を持っていることに加え、ご夫婦でカヌーに興じることのできるというこの余裕、労多くして功なくではなく財なせる職場にいたと

いうことを彷彿とさせられる方々のなんと多いこと多いこと。



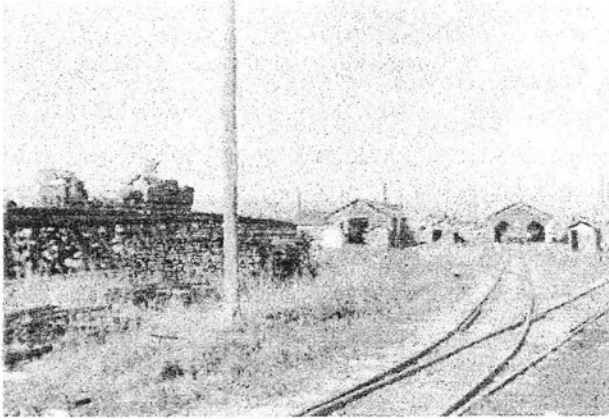
ついでに、ウチダザリガニのことについて触れておきます。1930年7月28日に雄248個体と雌228個体がアメリカから持ち込まれ摩周湖に放流された記録が残っているそうで、北海道でのルーツは摩周湖にありというヤツです。小さい方から、ニホンザリガニ<アメリカザリガニ<ウチダザリガニとなりますが、食用で持ち込まれたというだけあって、繁殖力は旺盛です。誰かが摩周湖から持ち出したようで、今では、生態系に悪影響をおよぼすまでになりました。阿寒湖では、レイク・ロブスターというネーミングで漁協が売り出しており、ホテルの観光客にも好評のようです。外来生物法に基づき特定外来生物に指定されているため、

無許可での飼育や遺棄、譲渡、輸入等が禁じられていますが、これが天塩川にもいっぱいいるのです。私も、ゆでたものを食べてみましたが、胴体はシャコと同じむき方でエビのような感じ、爪はカニのような感じ、そこそこミソもあり、エビなのかカニなのかよく分からない。本州のお客さんにしてみれば、エゾシカなどのジビエ料理と同じように滅多にお目にかかれない味として新鮮なのでしょう。

2 古い写真を見つけました !!!

林業で繁栄の基礎を築いた美深町、往時を偲ぶものはないかと思っていたら出てきました。もうすぐ還暦の私と同じような古い写真です。いつか紹介してみましよう。

この写真は、森林軌道で木材が搬出された様子です。森林軌道といえば、木曾や屋久島、十勝三膜などが知られていますが、美深では仁宇布という地区からエゾマツが運ばれました。この森林軌道跡は、現在、トロッコ王国の軌道として利用されています。昨年、仁宇布で羊の乳からチーズを製造している移住者のことが、「人生の楽園」というテレビ番組で



放映されました。羊の乳は、1頭から350 ccしか採取できないそうで、チーズの生産量も少なく、奥さんと2人で丁度の生活でした。それが、放映されたとたんにFAXやらTELで注文が殺到し、ご主人がやつれるくらいハードな毎日になったようです。



次の写真は、駅裏の貯木場のようすです。見渡す限りの木材、当時はインチ材としてヨーロッパに輸出していたといいますから、もったいない話であります。

今は、木材をスライスする突き板の技術が進んでおり、相当の付加価値を生んだことでしょう。さらに、観光資源としても利用できるでしょうし、関連産業を含めると裾野の広い産業の育成や地域の振興に大いに役立つことで

しょう。もっとも、当時もそれなりの状況下で地域に繁栄をもたらしたことに違いはありませんが……………。



この写真は、市街地からほど近い報徳地区というところで伐採された、三尺丸太記念撮影のようすで、昭和24年2月のことといたします。

この地区は、昔からミズナラなどの優良広葉樹が多かったそうで、こんなに素性の良い木材が、わずか60年前には山に沢山あったということです。

当時は、ご覧のとおり冬山造材、これを馬そりで貯木場まで運んだのです。私の子供の頃も造材といえば冬で、学校の帰りに馬そりの後ろに乗っかっては大人に怒られたことを思い出します。馬も馬そりも見られなくなって久しいですね。

時代は変わり、こうした天然林から人工林へ、植栽から間伐へと林業も変化しております。やがて迎える人工林の主伐期ですが、間伐される材は経級も細く、コストや採算性の関係から林地に伐り捨てざるを得ないことも多いのです。

3 森林はやっぱり生物いけるもののふるさとだ !!!

この頃は、森林の施業もかつての木材生産から軸足を生態系に最大限配慮したものに変わってきました。ここでは、現在の取り組みや森林の持っている生き物のふるさととしての役割や価値を紹介します。



この写真は、既設の床固め工に新たに魚道を設置したものです。

これまでの魚道は、人間側の立場から魚に遡上しろと強制しているようなものでした。例えば、あまりに急勾配かつ落差が大きいため、魚が持つ体力では遡上できず、魚道の前面に魚が溜まってしまふ。また、魚道自体に砂礫が堆積し、魚道の意味をなさないなどでした。

写真の魚道は、台形式断面といって台形型のルートに階段状にステップがついています。

溪流によく見られる「瀬」と「淵」の両方が階段状のステップにあることから、魚が「淵」で休憩し蓄えた力で遡上するものです。また、「瀬」と「淵」があることにより水量が小さくても砂礫が常に流下するため土砂の堆積が見られず、維持・管理にコストを要しないメンテナンス・フリーという構造になっています。

写真だと小さくなるのでお見せできませんが、この魚道を設置したところ「サクラマス」が上流部にまで遡上できるようになり、溪床に生み付けられた「卵」を確認しています。

これまでは、魚道の前側にサクラマスが溜まり猛禽類のえさ場となっていたところが、上流部へと拡散したことから、海由来の栄養源を上流の森林にもたらしてくれるでしょう。



写真は、オシドリです。何で水かきのある鳥が森林にいるのか、一瞬、不思議な感じがします。実は、子育てを森で行うのだそうです。

これは、市街地近くの望みの森という場所の一番高いミズナラの枝にとまって周囲を見渡しているところです。

子育て用のえさは、森林の昆虫類というのも驚きです。

この写真こそ、おなじみのオシドリであります。水かきを持った鳥にふさわしく、水上をスイスイです。ところで、オシドリの夫婦といったら仲むつまじく永遠の愛を誓うと思われがちですが、職場の鳥博士にお聞きしたところ、毎年、パートナーを入れ替える恋多

き鳥とのこと。ダメサレましたね、世の中もこんなものでしょうか？



ところで、最近札幌にカモメが出没しカラスのエサを横取りしているとか新聞に載っていました。海辺よりよっぽどエサが採りやすい、いや盗りやすいのでしょうか。

同様に、こんな内陸にもオジロワシやオオワシが出没しています。冬鳥でサハリンから渡ってくることが知られ、羅臼や斜里に行った知床半島がメッカ

の地だったはずですが。

それが、エサを求めこんな内陸にまでやってこようとは？鳥博士によるとこの数年来の出来事だそうで、生態系のバランスの変わり目に遭遇するとは思いませんでした。



もっとも、中には留鳥になったオジロワシも数年前からいるようで、大学等によって営巣木候補といわれている立ち枯れ木もカウントされているようです。

左の写真はこれ全部、オオワシ君です。まるで、コロニーといった感じですね。天塩川ってすごいですね。



下の写真は、クマゲラ君です。

高いところを飛んでいると思いきや、朽ちた根株でアリを捕食中です。

聞くとところでは、全国の野鳥愛好家がこのクマゲラを求め、カメラ片手にどころか野球中継で使うようなカメラを背負って押し寄せ、互いに情報交換をしているとか。

だからクマゲラも大変で、衆人環視の中での子育てはストレスも多く営巣木を放棄

したり、人間がいるからクマゲラがいると察知した猛禽類によって親が捕食されるケースもあるようです。3羽生まれる子供のうち成鳥になるのが1羽いればいい方で、片方の親が捕食され、片親で育てていたもののそれも捕食され、幼鳥が巣の中で餓死することもあるそうです。人間界も野鳥界もかわいそうなことだらけです。ここでも、立派なカメラを持参する方は主に本州のシルバー世代の方々だそうですヨ!やっぱりね～。

エゾシカの食害

第11期 豊田 栄

今年の1月末、小樽から札幌へ向けて道道小樽定山溪線を走行中、定山溪温泉に入る手前の左側で、エゾシカ4、5頭が道路わきに生えている樹木を食害している場面を目撃しました。

そこは、定山溪温泉に向かって左手にある畑か牧草地あるいはササ地と見られる見通しの良い平地ですが、道路沿いには樹高5~6mのニセアカシアが17~18本とシラカンバ、ミズキなどが生えており、少し離れた土地の中ほどにも樹高6~10mのややまとまったシラカンバの樹林が形成されていました。

またシラカンバ樹林のさらにその後方や周辺にはイヌエンジュ、シナノキ、ハルニレ、イタヤカエデ、ドロノキ、エゾノバッコヤナギその他のヤナギ類などの明るい落葉広葉樹林が広がっています。後日地図で確認しましたが、落葉広葉樹林の奥には深い沢があり、豊平川に合流する白井川が流れていることがわかりました。

当時の積雪量は道路面から1.2~1.3mくらいあったと思われませんが、エゾシカは、その雪の上に出ている道路わきのニセアカシアの樹皮を約1~2mの範囲で食害していました。一瞬樹種を見間違えたのかなと思い、車を止めて確認しましたが、間違いなくニセアカシアです。ぐると剥皮された後のきれいな白い幹肌が印象的でした。また同じく並んで生えているミズキも食われていました。

車が近づいてもなかなか逃げるそぶりを見せません。近くには住宅や企業の保養施設があり、車の通りも比較的多いところですので、ちょっと人なれしているのかも知れません。周辺の樹木ではこれらのほかにハルニレ、イタヤカエデ、ヤナギ類などにも食害跡が見られました。しかしながら数多くあるシラカンバはまったく食われていないのです。

私は早春に樹液を採取し、健康飲料としても販売されているシラカンバのほうが、イタヤカエデと同じようにむしろエゾシカにとってニセアカシアよりも好ましい食材なのではないか、と思っていましたがどうも違ったようです。よほど好みではないようです。

エゾシカは冬期、食べ物がなくなるとその地域にある実にさまざまな樹木を食べています。例えばここで見られたイタヤカエデやハルニレ、ヤナギ類のほかイチイ、ヤチダモ、ホオノキ、ノリウツギ、イヌエンジュ、シナノキ、ヤマグワ、エゾニワトコ、そしてとげのあるタラノキやハリギリ、ハマナスなど、また時にはトドマツまでとにかく食べてしまうようです。しかしシラカンバを食害した話は聞いたことがありません。これは単に私の知識不足なのかもしれませんが。

食害されたニセアカシアは、幹周10~15cmで、食害部分は1~2m(2m以下)の範囲

で全周ぐるりと剥皮されていました。周辺の被害された樹木も同様でした。中には太い幹周のものも被害されていましたが、概ね幹周 20cm 以内のものが食べられていました。

幹周をぐるりはがされると樹木は大体 1 年で枯死するといわれます。これは形成層まで除去する、いわゆる「巻き枯らし」といわれる幹の環状剥皮と同じです。すなわちそのとき上方への水分通道機能はまだ残っていたとしても、葉で作られた物質が下方へ送られなくなり、新しい樹皮も形成されなくなるので樹木は枯死してしまいます (1)。ただ枯死するまでの期間は、樹種によって若干幅があるように思います。

3 年ほど前のことでしたが、定山溪近くのパーキングトイレ脇に植栽されていたモミジ（確かヤマモミジとだったと思います）とエゾヤマサクラが、冬期野ネズミに幹をぐるりとかじられて枯死したのを見たことがあります。

樹木の規格は、どちらもほぼ同じくらいで樹高 4.5~5m、葉張り約 3 m、幹周 24~25 cm、でしたが、エゾヤマサクラのほうが先に地上部が枯死してしまいました。幹の剥皮範囲はともに 1.3~1.4m の長さでした。ただエゾヤマザクラの根元からは、2 本の小さなひこばえが出ていました。モミジもエゾヤマザクラも幹の材は散孔材です。ただカエデ類は、辺材から心材への移行期間がサクラよりも長く、また辺材中の柔細胞も長期間生きていますと言われます (1)。そうしたことから貯蔵養分の存在や水分通道の面が影響し、枯死に至る期間に差が出たのでしょうか。

それでは剥皮を受けたニセアカシアの場合はどうなのでしょう。

ニセアカシアは、痩せ地でも裸地が出来ればそこに素早く育ち成長するパイオニア植物で、崩壊地や炭鉱跡地などの緑化植物として用いられていますが、その材もまた強さと耐久性に優れていることから、建築構造材、家具材、工芸材としても利用されています。また養蜂家の人たちにとっては蜜源植物として大変重要な樹木でもあります。

しかしその一方、外来種で繁殖力が非常に強くあちこちに急速に広がっていくため、林業を始め緑化の上では問題のある樹木とされ、在来植物を駆逐するということから 2006 年に環境省によって「要注意外来生物リスト」の指定を受けました。

このように成長力旺盛なニセアカシアに対し、除去対策として幹の環状剥皮を試みた報告があります。結果は地下水平根から、それほど多くはないけれども萌芽発生があったとのことで、やはり繁殖力は強いようです。

今回エゾシカによる剥皮を受けたニセアカシアは、そのまま枯死するのでしょうか、それとも枯死せずに根からの萌芽発生、成長という状況をたどるのでしょうか。なかなか興味深いところでもあり、今後の経緯を見ていきたいと思えます。



羊ヶ丘にて

参考引用文献：(1) 堀大才、岩谷美苗：樹木の診断と手当て (2002)

真駒内の古木くまなく調査によせて

第12期 阿部 正太郎

2011. 11月3日(土)文化の日、紺野哲郎(82歳)さんと一緒に真駒内公園にある※大木を見てまわり、樹齢の判定などを行い、ダンの開拓当時から現在も残っている樹木の調査と樹木名板設置のお手伝いをさせていただきました。その時のことが、“樹木医らの協力で”というように2011. 12. 13の道新に記事が載りました、樹木医らとあるのは橋場・真田・阿部の3人です。(表紙裏2p参照)

記事に「真駒内の地は1876年(明治9年)、米国人指導者エドウィン・ダンが広大な農場を開き、戦後は米軍が宿舎やゴルフ場を建設・・・この変遷の中で多くの木が伐採された」とありますので、この当時の真駒内について、もう少し詳しく知りたいと思って調べてみました。

以下、記述します。

最初にエドウィン・ダンですが、ダンは米国オハイオ州で大農場を経営していた父や祖父のもとで農場・牧場のノウハウを身につけました。

日本では当時、家畜も農業技術者も不足していたので、開拓使顧問であったケプロンは米国の息子に技術者のスカウトを指示し、ケプロン・ジュニアはダン農場を訪れ、彼を開拓使の農業技術者に選びました。(ダン農場も1870年の恐慌の打撃を受けて、経営は大変で、年俵1,500ドルの給金はダンにとって魅力だったようです。)

ダンはこれを受けて明治6年、24歳のとき、牛とめん羊を連れて来日し、明治9年に献身的な妻となる「つる」(七飯に住む開拓使役人の娘)を伴い札幌の地に来ることになります。官園として予定されていた所は札幌農学校(クラークが教頭として赴任・ダンも教えに行った)になったので、ダンは札幌南部のマコマナイで新たな官園の建設に着手することになります。

当時のマコマナイはまだ平岸から定山溪に抜ける細い道だけがついた原生林(ダンは大密林とよんだ)で、ダンはここに故郷オハイオ州のような大牧場をつくることを夢見たのです。ダンはこれから、ここで飼われる牛や馬のことを思い、太陽の動きや風の向きを考えて、原生林を切り拓いていきました。その年に開墾した畑は33haで、オンコの木を切って、牧柵を作り、牛64頭を入れました。(新聞には“オンコは1本だけで、紺野さんはダンの時代牧場の柵につかわれたのでは・・・”の記述がありますが、このことです。)その後、ダンはあらゆる工夫をし、馬や豚、羊なども飼い、後に畜産のメッカとなる「真駒内牧牛場」の原型が少しずつ出来上がっていきました。

ダンの功績は牧牛場経営だけでなく、飼育管理の指導、品種改良、獣医学・解剖学の講義と指導、新冠牧場を整備(後、日高地方が馬産地として発展)、西洋式競馬の実施、ハムやバター製造を指導、プラウ等の導入、真駒内用水路の建設など非常に多岐にわたっていました。なお、町村金弥(町村信孝の祖父で、札幌農学校の二期生、卒業後、ダンのいる牧場に勤務し、後を引き継いで場長)などの後継者を育てました。若干、24歳で来日し

たアメリカの若者がこのような多彩な知識を持っていたことは驚くしかありません。

6年後の明治15年開拓使の廃止とともに、北海道庁（1国3県時代）が設立され、ダン
は後ろ髪を引かれる思いで、東京に身を移すことになりました。

ダンが開墾した真駒内牧牛場は町村金弥に引き継がれ、その後、幾多の変遷をへて、北海
道農業試験場畜産部」時代へと続いていき、真駒内の広大な牧場の光景は、開墾依頼70
年間変わることがありませんでした。

しかし、戦後、真駒内に大きな転機がやってきました。進駐してきたアメリカ軍の“真
駒内を基地としたい”という強い要求（牧歌的な真駒内は故郷のノース・カロライナに似てい
た）に勝てず、真駒内全域2,800haを接收され、大々的な基地建設が行われ、真駒内
は牧場だったところが一大軍事基地に変身してしまいました。そして、農業試験場は十勝
新得に移転することになり、道立新得畜産試験場として引き継がれ、牧場としての真駒内
の歴史に終止符が打たれたのです。

それ以来約10年間アメリカ軍事基地「キャンプ・クロフォード」となって、真駒内には
大勢のアメリカ軍の兵隊とその家族が住むこととなりました。真駒内は千歳基地とともに
北海道の拠点であり、第2次世界大戦後の北方警備の最も重要な拠点になったのです。

基地の日本への返還が行われたのは昭和30年からです。最初に基地の北半分が返還さ
れ、特徴あるレンガ造りの兵舎などはそのままに、陸上自衛隊が真駒内駐屯地として使用
することになり現在にいたっています。後から返された南側の半分は一部に道営の住宅団
地がつくられることになりました。現在、道立真駒内公園となっているところは、占領時
代、アメリカ軍と家族のゴルフ場だったところです。

その後、昭和47年に6競技の冬季オリンピックが札幌で開催され、そのうち3つの競
技場が真駒内に設けられることになりました。真駒内は札幌の中心から近いこと、占領し
ていたアメリカ軍から返還された広大な土地があることが何よりオリンピック開催の条件
としていい場所だったのです。これにより真駒内は世界中に知れ渡ることになります。

真駒内の歴史について以上の様なことを知る事ができましたが、紺野さんはこのよう
な劇的な変遷を経たマコマナイ、北海道畜産のメッカとなるマコマナイ、そこに心血を注
いだダンの偉業、そして、そんな中で生き残ってきた樹木があることを後代に残そうと思
い、長い期間、調査研究されてきました。それに対して幾分なりとも関わる事ができた
ことはこの上ない幸せとするところです。

紺野哲郎さんのプロフィール

1929 夕張に生まれる。北海道大学卒業。札幌市採用。
元札幌市経済局長。絵画に関心を持ち、収集した絵画を常設して、調査
研究を続ける一方、自宅ギャラリーで、岸田劉生の作品をはじめ、収蔵
品を公開。著書に「岸田劉生の日本画の研究」。
公衆衛生、住民組織の研究を学会などに発表、多くの論文を著す。
食品衛生、「黄豚の研究」で、北海道獣医師会賞。
「画家足立源一郎」著述。「チャチャニレの木」著述。
札幌開拓の歴史（1）「札幌農学校遊技会・チャチャニレの木」著述
（社）日本陸上競技連盟秩父宮賞受賞。（社）日本陸上競技連合功労賞
受賞。
北海道学生陸上競技連盟名誉会長。
（社）日本陸上競技連合名誉会員。

*この時（11月3日）
撮った写真が43pの
写真になっています。



「樹木医の仕事」

第7期 吉田 憲一

1 木の専門家「樹木医」

昨年の東日本大震災（私の認識名称は東北太平洋岸大津波福島原発大震災）以降、「専門家」という言葉がこれほどマスコミで使われたことはなかったような気がする。「専門家会議」「専門家の知見（意見）」「専門家の道徳」・・・、そしてそれに輪をかけて「想定外」という言葉が飛び交い、その使用頻度に反比例するかのよう「専門家」の立場が脆弱になってきたようにも見える。樹木医は「木の専門家」であるが、それを取り巻く森林、林業、地理（地形）、地質等、また山々に降った雨が川となり海を目指して流下するように、水文、砂防、海洋等についても意識を向ける必要があり、さらに、それらに関わる「人間」の生活にも目を向けなければならないとは・・・。専門家としての「樹木医」について自問自答する1年であった。

2 樹木解説（ガイド）という仕事

樹木医の主たる仕事として、樹木の診断（調査）・治療・管理方法の提言等が挙げられるが、このほかに「樹木や森林についての解説（ガイド）」という仕事がある。これは「木に対する仕事」ではなく「木を介して人に対する仕事」で、ある意味では全く別な技術が必要になる。自分だけわかってはだめで、自分を媒体（楽器）として樹木や自然の仕組み、不思議さ、感動を伝える技術が必要で、参加者の特徴や年代を考慮した柔軟性も必要とされる。



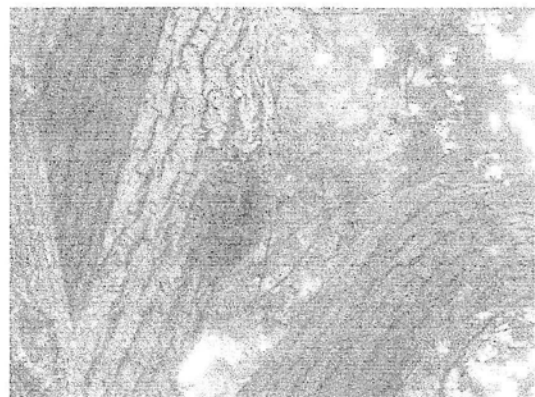
最初の「つかみ」が肝心！

3 準備から実行「3Sの原則」

「ぶっつけ本番」や「見切り発車」的なケースもたまにはあるが、やはりイメージトレーニングを含めた事前準備はガイドの王道ではないだろうか。「下見」「仕込み」「仕掛け」の「3S」は特に重要で、「現地確認」を基に「最新の現地情報」を「仕込み」、解説時の絶妙なタイミングで「仕掛け」を行う、という一連の流れを大事にしたい。大人は騙せても（？）、子供には全然通じない「仕掛け」でしばしば冷や汗をかくことがあるが、特に子供は興味をそそる「動き」ながらの「仕掛け」と普段着の「話術」が必要で、結構骨の折れる仕事である。



「クイズ」を取り入れるのもポイント！



下見で確認した高所「ミツバチ」の巣。「回避」ではなく「題材」として利用！

4 次世代への継承

昨年、空知管内浦臼町で行われた小学生高学年を対象とした「森林ふれあい教室」での事例を紹介したい。下の「木の健康診断」表は、「下見」の「仕込み」から考案した「仕掛け」の一つである。

- ① 先ず班毎に木の「大きさ」を巻き尺や測量スタッフで測って実感する。
- ② 「木の形」「枯れ枝」「虫や病気」等の項目を一人一人が○△×で評価し、それぞれポイントを掛けて合計を出す。
- ③ 班毎に合計点の平均値を出して、5段階の「健康診断結果」に合わせて判定する。

測定器具を持って木に触れながら動き回り、単純なかけ算と平均の考えで「算数的」な要素を入れ、その結果不思議？と木の健康段階が実感できる流れになっている。子供達にとっては「巻き尺」で測ったり、「測桿」の伸ばし（縮ませ）作業自体が「遊び感覚」で楽しく、最終的には自然と木の名前を覚えている。ちょっと工夫した「仕掛け」で小さな「木の味方」を増やしていくことも「樹木医」の仕事の一つではないかと思われる。

木の健康診断

さあ！木が無気かどうかしらべてみよう！
木のお医者さんになってみよう！

1 調査日(調べた日) _____

2 調査地(調べた場所) _____

3 調査員(名前) _____

4 木の名前 _____

高さ	m:メートル
枝の幅	m:メートル
枝の高さ	m:メートル
幹の回り	cm:センチ
幹の直径	cm:センチ

○で囲んで下さい

調べること	○	△	×
1 木の形	よい	ふつう	わるい
2 枯れ枝	あまりない	すこしある	たくさんある
3 葉の色や形	よい	ふつう	わるい
4 虫や病気	あまりない	すこしある	たくさんある
5 腐やくされ	あまりない	すこしある	たくさんある
○△×の数			
かける数	0	1	2
かけた数			

合計(たした数) _____

※合計にあてはめて下さい

木のようすや感想(思ったこと)

元気かな～？ どうかなあ～？

健康診断結果

【合計】 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

○で囲んで下さい

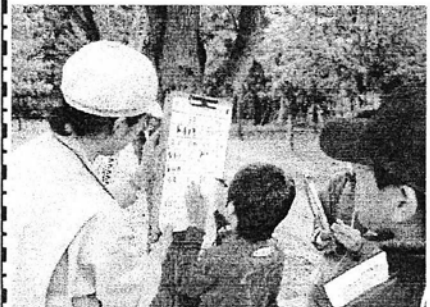
とてもよい	よい	ふつう	わるい	とてもわるい
-------	----	-----	-----	--------



「測桿」は楽しい遊び道具！



「木の大きさ、太さ」を実感！



測定結果発表！「記録」と「平均値」で木の健康を実感！

鈴木順策（顧問・第3期）氏 北海道社会貢献賞受賞

平成23年度の北海道社会貢献賞（森を守り緑に親しむ功労者）を、本会顧問の鈴木順作氏が受賞されました。

鈴木氏は、平成3年に北海道営林局北見支局を退職後、樹木医資格を取得され、地域の巨樹、巨木の診断や治療など樹木医としての活動のほか、「緑と花の市民の会」、「オホーツク森の案内友の会」「北海道グリーンコーディネーター」「桜の名所づくりアドバイザー」「知床永久の森林づくり協議会」など数々の役職で活躍されておられます。これらの活動が認められ、去る12月15日にKKRホテル札幌にて表彰式が行われ受賞されました。

おめでとうございます。

なお、この賞は平成20年度に日本樹木医会北海道支部が団体表彰を受け、平成22年度に斉藤晶氏が受賞され、樹木医として三回目の荣誉に輝きました。



受賞する鈴木氏 2011(23).12.15 KKRホテル札幌

北見の樹木医・鈴木順策さん

北見市の鈴木順策さん(76)が「森を守り緑に親しむ功労者」として23年度北海道社会貢献賞を受賞する。平成5年から樹木医として樹木の

診断・治療で緑を守る一方、森林環境活動、人材育成に力を入れている。体力の続く限り燃やしている。木の大切さを発信した鈴木さんは平成3年南側の青葉通にある2本のカツワを治療する



「森を守り緑に親しむ功労者」に

鈴木さんの道社会貢献賞（森を守り緑に親しむ功労者）を北見市美山町の樹木医鈴木順策さん(76)が受賞した。鈴木さんは27日、北見市役所を訪れ、小谷毎彦市長に報告した。本年度の同功労者は3個人7団体で、オホーツク管内からは鈴木さんのみ。

鈴木さんは「次の世代を育てることに力を入れている。一方、オホーツク家の代表、オホーツク森の家内友の会」の会長など多くの緑化団体の指導的役割を果たし、森林環境教育や、木の大切さを発信に情熱を注いでいる。

鈴木さんは「森の生態系など生命の仕組み、その大切さを特に次代を担う子ども達に伝えたい」と話している。



道社会貢献賞を受賞した鈴木順策さん

代を担う子どもたちに森林の大切さを知ってもらおう取り組みに、今後も力を入れていきたい」と話し、小谷市長は「これからも北見やオホーツクの緑化に尽力してほしい」と激励した。(海老原知世)

23年度道社会貢献賞を受賞

局を退職。長年培った緑化技術と経験を生かして地域の緑化活動に力を注いだ。樹木医となってからは市の指定文化財の「緋牛内の大カツワ」や、東陵中学校

表彰式は12月15日、札幌市で行われる。

経済の伝書鳩 2011(23).11.25

北海道新聞 2011(23).12.28

卒業式を終えて

常松学園札幌工科専門学校
第18期生 岩瀬 聡

去る3月16日に第30回の卒業式があった。不況に負けず就職を決め、社会へと踏み出す卒業生の不安と期待の入り混じった表情に、かつての自分を思い出し懐かしさを感じる。入学してから2年の間には、東日本大震災もあった。被災県から来ていた学生にとっては、遠く離れた札幌の地で大きな不安を抱えての学校生活となった。しかし、それを乗り越えて卒業式を迎えたいま、多くの人に支えられて過ごした日々は、今後、人間への信頼というものに大きな力を与えることと思う。

卒業式を終えると、一息つく暇もなく新入生を迎える準備に取り掛からなければならない。中でもカリキュラム見直しは大きな仕事である。本校では、2年間で造園・園芸・林業など多岐にわたる内容が実践的に展開される。また、単位数も大学4年間に匹敵する量となっている。それら一つ一つについて、適切であったか、効果的であったかなどを検証する。実習や授業などでは外部の多くの先生方にお世話になっている。ほんの一例だが、森林実習では千歳や野幌森林公園などの国有林を利用させていただき、北海道大学院の学生や北海道森林ボランティア協会の方々と一緒に調査や造林施業をおこなった。また、樹木の移植や剪定などの造園実習では札幌造園技能士会から延べ10人以上の先生方に来ていただきご指導をいただいた。さらに、インターンシップでは夏に2週間、職場で体験実習をさせていただいているが、北海道森林管理局や森林総合研究所、札幌市公園緑化協会、そして、道内外の造園や園芸、林業会社など様々な機関、企業で学生達がお世話になった。中でも、樹木医の吉田憲一先生には大変親身なご指導をいただいた。学生に言わせると、樹木医は名前をよく聞くが身近にいない存在であるらしい。卒業時に樹木医補になり、将来は樹木医を目指す学生にとって樹木医の先生との体験はとても貴重なものとなったに違いない。今回、カリキュラム見直しの中で、学校を始め自分自身が、本当に多くの方々に支えられているということを改めて実感させられた。

自然を相手にしている私でも、その自然に対し怒りという感情を覚えた東日本震災から1年たった。吉田先生にお世話になった学生は東北復興の一助にと東北森林管理局を希望し、配属が決まった。岩手出身の学生は、JA職員としてあえて地元に戻ることを決めた。

‘先生’は、先に生きると書く。しかし、学生は遅しい。私より前を見て力強く歩んでいる。彼らは“絆”というものを感じ、理解している。震災では多くの方が亡くなった。しかし、亡くなった人との絆は生きている。それを生かすためにも、前を向いていかなければならない。皆、それぞれ支えあって生きている。今回改めて、学生からそのことを学んだ。

松山千春が言っていた。「金のある奴は金を出せ。知恵のある奴は知恵を出せ。力があるやつは力を出せ。そして、何も無い奴は元氣を出せ。」たまにはいいことを言う。よし、元氣を出そう!“絆”を感じ前に進んでいこう！

札幌市円山公園における台風の影響による被害報告と考察

15 期生 涌島（田淵）美也子

平成 23 年 9 月 5 日未明から 6 日にかけて、台風の影響（最大風速 20m 以上）により、私の勤務する札幌市円山公園とその周辺の樹木に倒木および折れ枝等、多数被害が出ました。

山林などではそれほど問題にならないような被害ですが、公園や緑地では道路や園路沿いの樹木が倒木をおこすと大きな被害をもたらすことがしばしばです。

円山公園内の主立った被害木は下記の表のとおりで、今回はほとんどニセアカシアに被害が発生しています。

NO.	樹種	本数	H	C	特記	被害内容
A	ニセアカシア	1	25	140	双幹(85.85)、株元キノコ	倒木
B	ヤチダモ	1	25	105	1と株元結合	倒木
C	ニセアカシア	1	25	213	双幹(140.130)、株元キノコ	倒木
D	ニセアカシア	1	20	60	斜面上部	倒木
E	ニセアカシア	1	22	180	双幹(86.155)、株元キノコ	倒木
F	ヤチダモ	2	18	60	ニセアカシアに巻き込まれ	倒木
	ニセアカシア	6	20~25m		枝折れ、頂部折れ、大枝折れ、幹折れなど	
	シンジュ	1	22		隣接のカラマツにも枝掛かり	大枝折れ、多数枝折れ

特に大きな被害がでた大径木の A, C, E については共通の特徴が見られました。

- ① 根元にキノコが確認され、根株腐朽により倒木
- ② 地上 4～5 m のところで双幹になっており、それぞれの幹も太く葉量もあり風圧を受けやすい
- ③ 大径木のため付近を巻き込み大きな被害をもたらしている。

A では隣接のフェンスをなぎ倒し、またヤチダモも共倒れしている。

C では電話線に掛かり木になり、夜中に大がかりな処理作業になった。また、倒木側にあったヤマグラワの大径木も太枝折れなど致命的な損傷を負った

E では付近のヤチダモ 2 本も巻き込まれて倒木した。

それほど大きくない D のニセアカシアも道路沿いの 5～6 m の法面上部にありましたが、同じく株元にキノコが確認でき、道路上に倒木したことによって通行車両を傷つけるという賠償問題が発生しました。

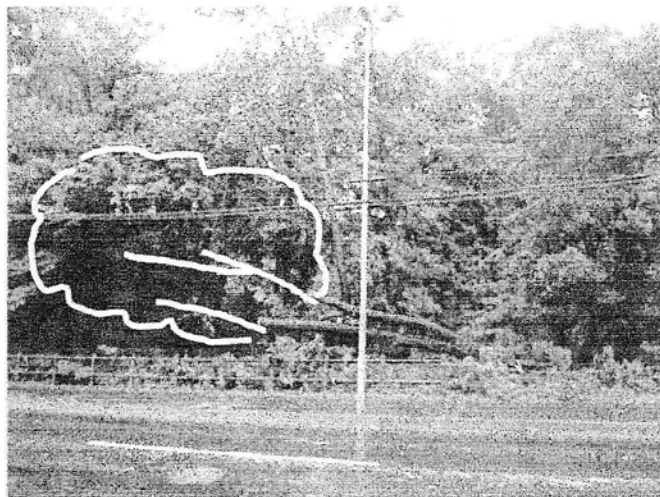
キノコははっきり同定できませんが、ベッコウタケの残骸のようなものと、多年生のレンガタケのようなものも見られました。

ニセアカシアは 40～50 年でピークを過ぎ、根株腐朽が入ることが多いようですが、上部の様子は比較的元気で旺盛なことが多く、特に上部が双幹などで樹体が大きく、葉量も多い場合は強風時に風圧を多く受け、体を支えられなくなって株元から引きちぎられるように倒れるのが特徴です。

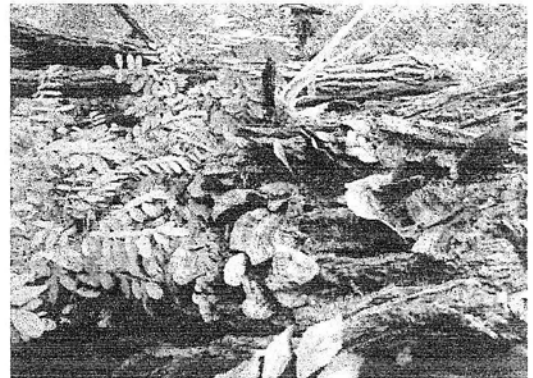
↓AのニセアカシアとBのヤチダモは株元で密着していた(右写真の左がニセアカシア、右がヤチダモ)。キノコや根株腐朽はニセアカシアに見られた。同時に倒れ、フェンスを損壊し、プランコや滑り台に覆い被さった。



↓Cのニセアカシアはバス道沿線にあり、倒木してNTTの架線に掛かった。夜9時頃発見し、緊急伐採で夜中2時頃まで処理にかかった。白線部が切り取ったおおよその樹冠部。



↓Cのニセアカシアの株元近くの幹部についていたキノコ。カワラタケのようなキノコ



←Cのニセアカシアは株元近くで、引きちぎられるように倒木した。

今回、あらためてニセアカシアの倒木による被害を軽減するため、他の公園管理者に向けてニセアカシアの取扱について提言を出しました。

倒木すると被害が甚大と思われる場所などのニセアカシアに根株腐朽（キノコ）が見られた場合

① 即刻伐採する。

② 強剪定を施し、風圧を受けないようにし、数年の内には伐採する。

また、ニセアカシアは実生や切り株、根茎から容易に繁殖し、成長も早いため、普段の管理の中でも、①植えない ②生やさない ③放置しない（大きくしない）を心がけるようにすることです。

また、ベッコウタケは出現時期が6月頃ですが、夏には枯れたようになって、発見しにくくなるため、時期を逃さず調査し、キノコが確認できた個体については記録をしておくなども重要な日常管理です。

また、ニセアカシアに次いで強風時に要注意しなければならないのがシンジュ（ニワウルシ）です。シンジュは倒木被害は少ないですが、枝がもろく、大枝折れ、幹折れなどをしばしばおこします。都市公園では落枝も非常に危険な要素で、警戒が必要です。特にメスの樹については、台風が襲来する時期に実をたくさんつけ樹冠が重く風圧を受けやすくなっています。実生萌芽が極めて多く丈夫で、路傍の狭い空間でも発芽し、数年でそここの大きさになってしまいます。この台風時にも円山公園内のシンジュは大枝が多数折れ、隣接する樹木などの高所に掛かり枝になりました。

掛かり枝はいつ落ちてくるかわからない危険があり、高所作業車などで取り除く作業をしなければならず、高額のコストがかかります。早めに処理をしていかなければならない樹種でしょう。



←強風時に枝折れしてシンジュ。歩行者などがいれば大けがをしてしまう。

明治時代、円山公園の敷地内に養樹園が設置され、ニセアカシアを導入し苗木を作り、全道に配布されたという事です。北海道におけるニセアカシアの発祥の地ともいえます。

現在、特定外来生物にも指定されかねないような旺盛な繁殖力で、街中で倒木をおこすと、きわめて大きな被害と多額の費用（税金）がかかることが予想されるニセアカシアの取り扱いについては、今後も個体を減らしてゆくことと、こまめな観察・注意が必要でしょう。

樹木診断の際にも、単木の診断ではなく、周辺に与える影響（倒木、落枝、繁殖など）を配慮して判断していただけたらと思います。

北海道に自生する常緑広葉樹

第 8 期 真 田 勝

昔むかし、南国九州の営林署から浦河営林署に転勤された方から、こんな話を聞いたことがあります。春4月サクラも終わり緑一色の九州をあとに3日がかりで新任地に着いて見れば残雪の山々に冬木立の木々が目に入ったが、緑葉がなくみんな枯れ木だと思ったといひます。それが1ヶ月もしないうちに全部芽が吹き出し、全山新緑の林に一変したのに大変おどろかれるとともに、大きな感動を受けたといひます。暖地の常緑林では味わうことのできない北国の感動の春のできごとだったと思ひます。

北海道には目立つ高木の常緑広葉樹の自生種は見られず、目立つ常緑種はみんなエゾマツ・トドマツ・アカエゾマツなどの北方針葉樹ばかりです。

北海道に自生する常緑広葉樹がどれくらいあるものかと、佐藤孝夫著の「北海道の樹木図鑑」をめぐってみると、別表のように33種が記載されています。高木種はなく、低木あるいは這い性、ツル性などでツツジ科が大半を占め、高山植物の範疇に属するものが多くみられます。

夏は林床植生として中高木の林下にあり目立たず、冬は緑葉をつけて目立つはずだが積雪に埋もれて見え、ハクサンシャクナゲやツゲの仲間が見え隠れする程度である。

これらの内庭園樹として最も多く植えられているのは、エゾムラサキツツジとハクサンシャクナゲであろう。グランドカバーとして、ツルシキミやフッキソウなどが利用されるほかは、盆栽家や高山植物の愛好家などによる鉢栽培などに利用される樹種が多い。

北海道に自生する常緑広葉樹

樹種名	科名	樹高(m)	分布	用途など
ツルシキミ	ミカン	0.5		グランドカバー
エゾユズリハ	ユズリハ	1.5	日本海側	
フッキソウ	ツゲ	0.2~0.3		グランドカバー
ヤドリギ	ヤドリギ	0.5		寄生
ヒメモチ	モチノキ	1	道西南	庭園樹
ツルツゲ	モチノキ	0.3~0.5		グランドカバー
オオツルツゲ	モチノキ	0.5~1.0	道南	
アカミノイヌツゲ	モチノキ	2		庭園樹
イヌツゲ	モチノキ	3.0~5.0		庭園樹・生垣
ハイイヌツゲ	モチノキ	1.5		庭園樹・生垣
マサキ	ニシキギ	3.0~5.0	道南	庭園樹・生垣
ツルマサキ	ニシキギ	ツル性		庭園樹・グランドカバー
カラスシキミ	ジンチョウゲ	0.5		庭園樹
キツタ	ウコギ	ツル性	道南	庭園樹
ヒメアオキ	ミズキ	0.5~1.0	道西南	庭園樹
イソツツジ	ツツジ	0.5~1.0	低湿地	庭園樹
ヒメイソツツジ	ツツジ	1	低湿地	鉢植え
キバナシャクナゲ	ツツジ	0.3	高山帯	鉢植え・庭園樹
ハクサンシャクナゲ	ツツジ	2.0~4.0		庭園樹・公園樹
サカイツツジ	ツツジ	0.5~1.0	道東落石湿原	半常緑樹・庭園樹
エゾムラサキツツジ	ツツジ	2	道北・道東に多い	半常緑樹・庭園樹
ヒメシャクナゲ	ツツジ	0.2~0.3	低湿地	庭園樹
コムバツガザクラ	ツツジ	0.05~0.15	高山帯	鉢植え
ミネズオウ	ツツジ	這い性	高山帯	鉢植え
シラタマノキ	ツツジ	0.2~0.3	高山帯	庭園樹・鉢植え
アカモノ	ツツジ	0.2	高山帯	鉢植え
イワナシ	ツツジ	0.1~0.25	道南・南暑寒	
ヤチツツジ	ツツジ	1	低湿地・泥炭地	
コケモモ	ツツジ	0.1	高山帯	鉢植え
ツルコケモモ	ツツジ	這い性	高層湿原	
ヒメツルコケモモ	ツツジ	這い性	高層湿原	
ヤブコウジ	ヤブコウジ	0.2	道南・奥尻・焼尻	庭園樹・グランドカバー
リンネソウ	スイカズラ	這い性	高山帯	

スリランカの植物を見て

第15期 桜田通雄

昨年、未だ雪の時節であった。植物関係の仲間から、スリランカの植物園、薬園を見て歩く、という旅に誘われた。現役時代、熱帯植物を展示・栽培する施設にいたこともあったので、熱帯産の植物をまったく知らない訳ではなかったが、熱帯地域そのものを見学したことはなかった。

成田から10時間ほどかかってスリランカに降り立つと、もう忘れかけていた湿気の高い、温い空気が体にまとわりついた。日本では、温室に栽培されている植物が露地に事も無げに生育している。頭では分かっている、奇異な感覚がある。温度、湿度が潤沢ということは、植物相が豊かである。色彩や形態も多様であることを、改めて感じる。いわゆる観光地には、まったく立ち寄りなかつた旅であったが、紅茶の栽培光景や庶民の利用する市場などは見た。風土をベースにして生育する植物が日常生活に密着し、豊富に出回っている様を見ると共に紅茶などが輸出産業として大きなものであることをこの目で納得した。

さて、思いがけなくの旅であったが、いくつかの関心事があった。その一つが、旧植民地の植物園がどのようなものであるのか、現在はどうなっているのかである。大英帝国は東南アジアに植物園をいくつか造った。カルカッタ、シンガポールなど、そしてスリランカのペラデニア植物園などである。

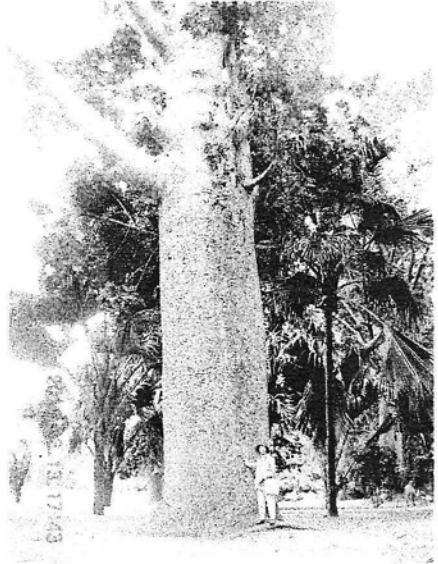
広大な敷地には、往時からのストックを随所に見る。樹冠を大きく広げたガジュマルの単木、双子ヤシの並木、とてつもなく太いナンヨウスギ、地際にのたうち回る板根のすさまじいポリウム、そして腊葉館はイギリス建築そのもので、標本が保管されていた。明治初頭に日本からロシアを経由しここに落ち着いた腊葉標本も見られた。この腊葉館は写真で見たカルカッタ植物園のものとまったく同じであり、アジア各地におけるイギリスの覇権の程を感じさせられた。今、植物園は公園的な利用が多いようであり、外国人は有料だが国民は無料である。子供達、家族連れも多かった。巨樹、のびのびと生育した樹形や圧倒的な植物による空間は替え難い資産である。一角には立派な研究施設もあり本来の植物園としての機能も果たしているようだ。その外、バスで巡って見学したいくつかの施設には、薬効ある植物類が栽培されていた。いずれ世界的な戦略資源となるのであろう、息の長い地味な仕事は大事である。

スリランカにはヒンズー、イスラム、キリストそして仏教の4つの宗教が入っている。仏教寺院は必ずボダイジュが植えられている。その維持管理、後継樹育成には、当地の樹木医が携わって、大事に扱われていることを聞いた。

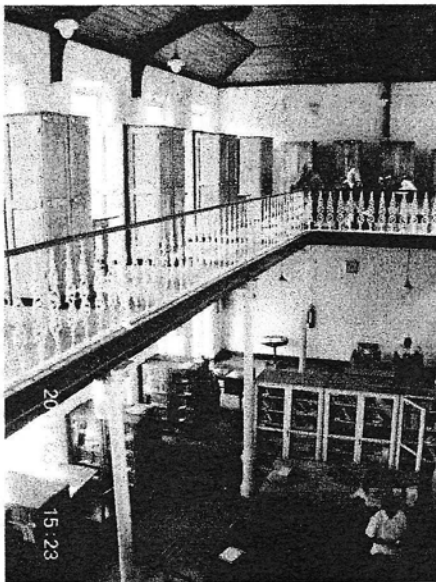
「LEARNING IS THE ONLY WAY TO FUTURE PROGRESS」小学校の壁面に掲げられていたこの光景が印象深かった。日本と較べた暮らし振りは貧しく見えたが、子供達への教育は熱心そうで、将来のスリランカの勢いを想像した。(完)



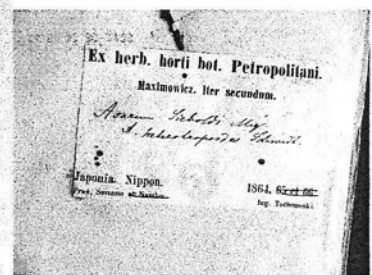
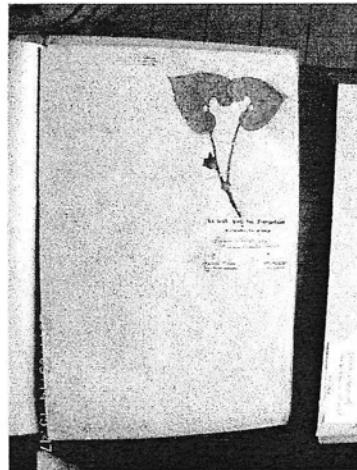
ガジュマルの単木



ナンヨウスギの巨木



腊葉館内部



左標本一部拡大
長之助、信濃などの記述
が見える

ロシア経由の日本産
植物（ウスバサイシ
ン）の腊葉標本



仏教寺院のボダイジュ
屋根を突き抜いている控木



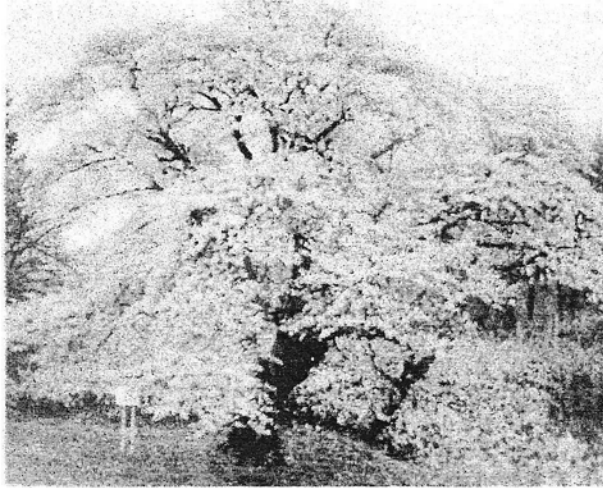
後継樹の育成



幌萌のエゾヤマザクラ巨木の辿った道

第11期生 金田正弘

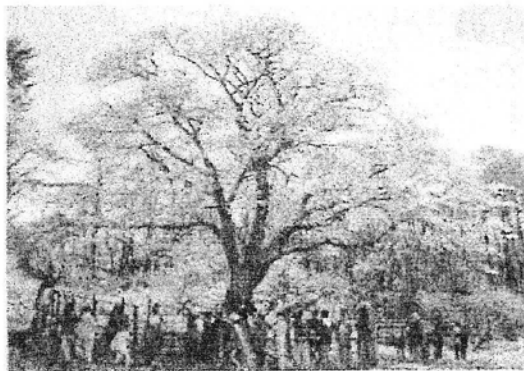
1978 (S53) 年室蘭市の保存樹木に指定



幌萌のエゾヤマザクラ (1997年5月13日満開)

幌萌のエゾヤマザクラ開花の写真としてあまりにも有名なものです。原画は室蘭市内の写真家、佐々木善昭氏が出版した「桜巨木巡礼」に収められたものです。2011年10月中幌萌会館に飾られていた写真を複製したものです。下枝は地面に付くのではと思われ、開葉に先立ち花で幹枝が隠れる樹姿を呈しています。地元住民の話で「太い幹が見えないので切ってあげる」と造園業者が下枝をすべて切除してしまったとか。桜の花は「手にとって見る、目線で見る」のが観桜の基本です。失った下枝は復活することは無く、残念の一言に尽きます。

地元住民だけの桜から全国的な名桜に



名物のサクラに (2005年5月21日室民掲載より)



ライトアップして夜桜見物 (道新掲載より)

推定樹齢180年～250年とも言われる幌萌の桜は、地元中幌萌町会の人達の手入れにより守られてきました。2000年からライトアップを開始「夜桜見物」ができるようになって、市内外から多くの観桜客が訪れ、貸し切りバスで団体客も見に来る名桜になりました。

名物サクラ雪で折れる



2006年4月2日から3日にかけて季節はずれの湿り雪が降り、東側2本の太枝が落下、掛かり枝になりました。太さ径40cm、長さ6mの太枝を2本失う大きな損失を被ることになりました。町会の人「ショックで最初は折れた枝を見るのもつらかった。また新しい枝が出てくれるといいのだがと肩を落としていた」(道新掲載文より)。と、事態の深刻さが伝わってきます。東側の太枝2本が落下倒壊 (2006年4月5日、道新掲載)

幌萌のエゾヤマザクラを治療する



治療前 (2011年5月30日)



治療後 (2011年10月18日)

幌萌のエゾヤマザクラは室蘭埠頭株式会社が所有管理しています。2011年周辺の民地を所有するに伴い、桜の治療をすることになり、これまで管理を行っていた市内の(有)牧造園を介して桜の専門家樹木医に依頼が来ました。6月調査診断を実施し、10月13日～18日の5日間に及ぶ本格的な治療となりました。

治療内容は東側太枝折損あとの不定根誘導治療、北側幹腐朽部土のう積み治療、根系樹勢回復処置等です。T字型支柱設置、保護柵設置及び周辺広範囲のササ、雑草類伐開、被圧支障木の処置を行った造園工をあわせ50人工を越す大掛かりな保護処置でした。(診断、治療の詳細は幌萌のエゾヤマザクラほか治療診断書及び幌萌のエゾヤマザクラ治療報告書を参考)。

古木エゾヤマザクラの治療を終えて (2011年11月)



巨大な幹北側腐朽部の処置



折損部の処置と主幹部の亀裂

樹木医同期の小倉五郎氏(伊達市在住)と共に「室蘭にとんでもなく大きな桜があるから見に行こう」と誘われたのは10年前だったような気がします。その大きさに驚き、開花状況を見たい、この桜を治療してみたいと思ったことがあります。太枝落下事象後、その思いは募るばかりで10年後小倉氏と共に運よく樹勢回復処置を行うことができ「木の命を守る」者として感慨深いものがあります。

治療を行う前に調査診断を実施し、それに基づき治療を進めることが作業手順です。しかし大径木の古木となれば目視の診断には限界があります。治療内容も試行錯誤の域を出ない状況にあれば、実際手をかけて初めて不良箇所が見つかることが多く、対応を瞬時に判断しなければなりません。樹木治療を志す樹木医はどんなに小さな障害でも見逃すことなく、適切な処置を施す技を身につけていなければなりません。治療を終えた今、貴重な古木の処置をできた喜びと同時に身が引き締まる思いです。

幌萌のエゾヤマザクラ所有者である室蘭埠頭株式会社は、2012年以降も定期的な維持管理を実施する意向を示しています。今回治療できなかつた地上10m位から上部数mに続く亀裂に一抹の不安を残しています。私に亀裂を回復させる手だては無く、外国で行われている「ブレーシング処置」がこれに相当すると思われます。径1m近くある幹を通すボルトはあるのか又、どうやってボルトを通す穴をあけるのか、現在調査中です。処置にあたっては足場を組み、とんでもない費用がかかるのか?等、初めての処置には勇気がいるものです。その間に「もしも主幹が倒壊したら」を考えると降雪、強風のたび不安がつり、処置をした責任の重さを感じています。



“道民の森の大ナラさん喜んでくれるかな”

(平成23年度技術研修会報告)

長く厳しい冬、各地にかつてない大雪と被害をもたらした冬もやっと終わり、春がやってきました。厳しく長ければ長いほど心も弾みます、まさにスプリングです、一番喜んでい

る生き物はなんだろうと考えてしまいます。道民の森ではスプリングエフェメラル達が待っているのでしょうか。

さて、例年実施している支部技術研修会は念願がかなって昨年は道民の森でやる事が出来ました。皆様とも関係する事もあると思いますので、報告をかねてあらましについて、紹介させていただきます。

道民の森での研修会を「道民の森管理事務所」に申し入れしましたが、大変、歓迎してくれて、“閑散期なので宿泊施設のB棟を貸し切りにしましょう、研修の時に出来れば大ナラとサクラの森を見てほしいのですが”ということになりました。

研修内容をいろいろ考えていたところなので、この方向で研修することになりました。

研修の1日目は地元の当別小学校から、かねて要望のあった「衰弱しているアカマツ(貴重な校木)」について樹勢診断と保全方法の検討を行い(音響波を用いた非破壊の精密診断機器・ドクターウツズを使用)その後、「道民の森での植樹」を参加者全員で行い、B棟(せせらぎ棟)で宿泊しました。樹木医の植樹なので枯れたら困ります。

2日目は研修室で管理事務所の梅井課長から豊富な資料により道民の森のレクチャーを受けた後、「黄色コースの大ナラ」に向かいました。

道民の森のシンボル樹木になっている大切な大ナラですが根元周辺の土は長い間、訪れた大勢の人たちの踏み固めにより、かちかちに堅くなり、むき出しになっています。根からの養水分の吸収・根の呼吸など十分に出来なく、大ナラには厳しい生活環境です。

推定樹齢450年の老木なので、長いあいだに腐朽が進み幹には大きな空洞(腐れ)もありますが、生命をつかさどる師部・導管部には健全部もあり、枝ぶりや葉の状態などさしたる衰えは見られません。

堅結していないところをさがして懸命に根を伸ばし呼吸し養分を吸収しているのでしょうか。

よく、大きな庭木が急に弱ってきた、枯れそうになってきたという相談をうけますが、その殆どの原因は根からの水分吸収と盛土などによる呼吸不全によるものです。大ナラの根系環境をできるだけ改善して、末永く、元気で生きてもらうにはどうしたらよいでしょう、研修の課題です。

いろいろの意見が出されましたが“踏圧を防ぐために行きと帰りの2方向と樹の周囲を囲むように木道を設置し、同時に堅い土を掘り起こして栄養土を客土し、そこに乾燥と景観を兼ねて芝生などでマルチングをすることが良い”ということで集約されました。これにより、土を踏まずに子供達が樹に触れることが出来、根系環境の改善により樹勢が回復

し、施設などの設置により大ナラに風格がでて自然景観も良くなるということが期待できるというのがその理由です。

なお、さらに樹勢を回復するために、幹の空洞（腐れ）部から派生（はせい）している不定根を下の土壤にまで誘導して、根の働きをさせることが有効と言う意見も出されましたので、これには、機会をみて私達がボランティアで実施できれば良いと思っています。

次に、大ナラから最短コースを下ると“サクラの森”があります。道民の森が出来たとき、植栽されたものですが、植栽間隔が狭かったこともあり木々が交差し、コブ病・^{がんしゅびょう}癌腫病・天狗巣病などになっている木がいたるところに見られ、このまま放置しておくとも全滅の危険性も感じられます。

治療も含め、いろいろ意見がだされましたが、“伝染性の病気が多いので、これ以上被害を拡げないために羅病の程度が軽微な木は腐朽部を部分的に切除し殺菌剤などを塗布するなどして樹勢回復を図るが、それ以外の木はまだ元気な木を保全するために伐採する必要がある”というのが集約された意見です。

なお、今回の技術研修会には管理事務所やボランティア協会の人達も参画してくださり、案内と説明をして頂きましたが、後日、管理事務所の方から研修結果が実現される方向になったとお聞きしました。これにより、“大ナラとサクラの森”の末永い保全が図られればなによりのことと思います。

最後になりますが、樹木医の活動場所は街路樹や公園などの都市が多いのですが、今回の研修をとおして「道民の森」でおおきな自然に触れる事が出来、別荘のようなせせらぎ棟での自炊と懇親も新鮮で楽しく思い出深い研修会になりました。

研修会にご協力頂いた、道民の森管理事務所とボランティア協会の皆様に感謝いたします。

一般社団法人日本樹木医会 北海道支部
事務局 阿部 正太郎



道民の森 大ナラ遠景



踏圧を受け裸地化する大ならの根圏

館 和夫さんの名作紹介

昨年の9月、北見市へJR特急列車で旅行したときに、車内にて配布されている「THE JR Hokkaido」(北海道旅の情報誌)を読んでいた。北海道内の観光地の風情やバラエティに富んだコラムを掲載しているPR誌で、いつも気に入って読んでいます。

いつものように何気なく開いていくと、特集「川田龍吉・男の美学」が目につきました。

そこには、館和夫さんの著書「男爵薯の父・川田龍吉伝」が紹介されているとともに、樹木医として活躍されている現在の姿の写真を掲載しておりました。

この特集には、館さんが取材した川田男爵の「男爵薯」や函館ドック等の造船事業、国内初の蒸気自動車等、生涯をかけた農工共栄の実績が掲載されていました。

館さんは、これまで道立林業試験場の研究員や道の専門技術員としても数多くの実績を残されてきましたが、文筆家としても優れた文才をお持ちで、永い歴史をもつ道南地域での取材・調査や記録、執筆など数々の成果を残されています。

上記以外にも、「江差追分物語」等、多くの秀作を出版しておりますので、この機会に皆様にもご紹介させていただきます。

・ 男爵薯の父「川田龍吉伝」 館 和夫著 1991. 12. 24 道新選書22 北海道新聞社

「男爵薯」は1908年に種子を輸入されてから100年余、現在も全国的に栽培され、美味しく食材となっておりますが、この陰には川田龍吉男爵の生涯をかけた歴史があり、館和夫さんは、これらの多くの取材や収集資料によって、分かり易く記述されており、優れた名作です。

・ 「江差追分物語」 館 和夫著 1989. 2. 28 道新選書13 北海道新聞社

「江差追分」は、江差地方の風土が育んだ民謡であり、近年、全国的にも普及・定着していますが、そのルーツは1800年代に北前船に乗って越後・信州方面から伝えられたとも言われています。館和夫さんは、少年時代に江差地方で過ごし、追分に関わるこの土地の古老の方々との話題、交流をとおしての原精神に触れ、これまでの歩みとこれからの発展方向を記述されており、「かもめの～」と謡うときにより感動・愛着を覚える名作といえます。



(一般社団法人日本樹木医会北海道支部 橋場一行)

平成23年度 一般社団法人日本樹木医会北海道支部の活動報告

事務局

一般社団法人日本樹木医会北海道支部は、北海道に在住する樹木医である正会員（一般社団法人日本樹木医会の会員）と、賛助会員（緑化・造園関係者）によって構成されており、平成23年度現在の会員数数は、正会員が48名、賛助会員が10名である。平成23年度における、支部の主な活動状況は、次のとおりである。

1 日本樹木医会の行事に関わること

(1) 平成23年度一般社団法人日本樹木医会理事会

平成23年6月3日（金）総会に先立ち、長野県長野市鶴賀高畑752-8「メルパルク長野」で開催され、支部長が出席した。審議事項は通常総会における提出議案の内容の検討と確認であった。

(2) 平成23年度一般社団法人日本樹木医会定時社員総会

平成23年6月3日（金）長野県長野市鶴賀高畑752-8「メルパルク長野」で開催され、理事会に引続き支部長が出席した。総会には全国から正会員307名が出席し、平成22年度の事業・決算報告、平成23年度の事業計画・予算（案）等が審議され、原案どおり承認された。

(3) 平成23年度 一般社団法人日本樹木医会 第1回理事会・第1回業務執行理事会合同会議

平成23年8月6日（金）東京都文京区「文京シビックセンター」で開催され、支部長が出席した。審議された主な議案は、人事に関する事項、各部会活動について（事業実施計画 業務執行状況等）、平成24・25年度大会開催予定地（福岡市、宇都宮市）等であった。

(4) 平成23年度 一般社団法人日本樹木医会 第2回理事会

平成24年3月24日（土）東京都千代田区「弘済会館」で開催され、支部長が出席した。主な審議事項は、暫定予算、感謝状贈呈者、平成24年度定時社員総会議案等であった。

2 北海道支部の総会・役員会

(1) 総会

平成23年度北海道支部の通常総会は平成23年4月8日（金）16:00~17:00、KKRホテル札幌（2Fはまなす：札幌市中央区北4条西5丁目）で、会員37名（正会員36名、賛助会員1名）が出席して開催された。

支部長の挨拶に続き、来賓として出席された北海道水産林務部森林環境局森林活用課・主幹今村欣子氏、主査 曳地孝夫氏から、挨拶と樹木医に関わる北海道の行政施策についてご説明をいただいた。その後、議長を選出し、議案審議が行われ、平成22年度の活動報告と決算報告、平成23年度活動計画と収支予算（案）が原案どおり承認された。

さらに、「技術研修会」の開催、「樹守」No.20 記念号の発行、グリーンコーディネーター（10名）の推薦等について討議され、承認された。

(2) 役員会

平成24年2月28日（火）札幌市（北海道林業会館3F会議室）において、第1回役員会が開

催され、理事7名、監事2名が出席し、平成24年度通常総会の開催予定、「技術研修会」の内容、「樹守」21号の発行予定、平成24年度の支部活動計画、役員改選等について、検討を行った。

3 情報交換会・講演会・研修会

(1) 情報交換会

情報交換会は、平成23年4月8日（金）北海道林業会館5F会議室において、正会員37名が出席して、平成23年度の北海道支部の活動や運営について、さらに、当面する樹木医に関わる課題や樹木の育成・保全等の地域・技術情報等について、意見交換を行った。

(2) 講演会

講演会は、平成23年4月8日（金）14:30~15:45、KKRホテル札幌（7F北斗）において、佐藤孝夫氏（北海道立総合研究機構・林業試験場・緑化樹センター所長）により「樹木の根系と維持管理」と題して講演をいただき、会員39名が受講した。

(3) 研修会

平成23年度の「技術研修会」は、会員17名が参加して、平成23年9月16日（金）～17日（土）の両日、石狩郡当別町の当別町立当別小学校（当別町元町102）と「道民の森」（当別町青山）において開催された。

当別小学校では、当小学校の衰退している「アカマツ（記念木）」について、参加者全員で樹勢診断と治療方法の検討を行った。また、非破壊の精密診断機器・ドクターウッズ（音響波を用いた樹木内部診断）によるデモンストレーションが行われた。なお、この検討結果は、当小学校（教育委員会）に報告した。

「道民の森」では、指定管理者（北海道森林整備公社）の担当者・梅井敏則氏から当施設の概要説明があり、その後、杉浦勲氏（道民の森ボランティア協会）の解説のもと「ミズナラ巨木」を見学するとともに、今後の維持管理について参加者全員で検討を行った。

さらに、「桜の森」（エゾヤマザクラ植栽地）において、衰退木、病害木等の現況と今後の処置・対策について、検討を行うとともに、指定管理者に提言を行った。

この道民の森の見学と施設利用の記念として、参加者全員で「エコ・チャレンジの森」に記念植樹行って、有意義な技術研修を終了した。

(4) 行事・活動に関すること

- ① 北海道支部会報「樹守」No20（2011.3.31発刊）を発行し、会員（正会員・賛助会員）に配布するとともに、日本樹木医会や交流のある各都府県支部、関係機関、関係者等に配布した。
- ② 平成23年度「みどりの環境改善活動支援事業」（北海道水産林務部）のグリーンコーディネーターについて、会員の中から10名の推薦を行った。（2011.4.15）
- ③ 日本樹木医会の会誌「TREE DOCTOR Vol.18」を、賛助会員10法人に配布した。（2011.7.31）
- ④ 「道民森づくりネットワークの集い2011」が、札幌市（道庁赤レンガ前）で開催され、北海道支部として、「樹木医相談コーナー」を開設した。
- ⑤ 樹木医として、地域において樹木保全や森林環境の指導、ボランティアとして貢献された鈴木順策氏が、平成23年度北海道社会貢献賞を受賞された。

（一般社団法人日本樹木医会北海道支部）



真駒内公園の推定樹齢320年のハルニレ

“公園利用者がよく通る道路沿いにあり。付けた樹木板も有意義だろう”（紺野さんの言葉）

表紙：「樹木医と歩く知床の^{もり}森林」トドマツの大木の下で
写真：鈴木順作



ドクターウッズによる診断法の研修（当別小学校）



冠雪害を受けた当別小のアカマツ



広い用地に記念植樹を終えて（道民の森）



大ナラを仰ぎ保全策を討論（道民の森）

平成 23 年度技術研修会（2011.9.16～17）

当別小（アカマツの樹勢診断と治療法）道民の森（ミズナラ巨木の維持管理、桜の森の今後の維持管理）

協力：当別小学校・道民の森指定管理者（北海道森林整備公社）

*****編 集 後 記*****

東日本大震災、大熱波の真夏日、大寒波の真冬日、豪雪に見舞われる日本列島にも季節は巡り、花の便りも聞こえ始め、桜前線は時速2Kmで北上中なり、聞けば開花はほぼ平年並みとか、大熱波や大寒波にもめげず樹体時計に狂いはなかったのか、それとも樹体温度計が調整しているのか樹木の耐性力・順応力には驚かされる。

周りの樹々に支え、支えられて270年育った陸前高田の「高田の松原」(身近な松原散策ガイド：日本緑化センター2007)が一瞬にして「奇跡の一本松」になった。太平洋からの強風を防ぐために作られた7万本の飛砂防備・潮害防備保安林、地盤沈下による塩水、強風、熱射など生育環境の急変に一本では耐え切れず絶え果てた。

樹木医活動も20年を過ぎ、当初に手がけた治療木も、再度の治療が必要な時期になっているなか、館さんから「縁桂」の補修と今後の保護対策の投稿をいただいた。また、桜保全に情熱をささげる金田さんからは、「桜の治療」と「エゾヤマザクラの巨木の話」の2編をいただいた。地方に転出された高谷さんからは「道北の森林地帯の今昔」として、林鉄や巨木のソリ出しなど昔懐かしい写真を添えていただいた。ほか多くの方々にご投稿をいただき「樹守」21号44Pをお届けすることが出来ました。ご協力ありがとうございました。(真田)